ルーテル教会

キリスト教信仰へのガイド

～愛と恐れと信頼と～

2

石　居　正　己　著

日本福音ルーテル教会

目　　次

1　神を愛し、隣人を愛する …… 1
2　恵みに与かる礼拝 …… 4
3　主に向かって歌う …… 7
4　私にとっての神のことば …… 10
5　主の祈り …… 13
6　恵みへの応答として …… 16
7　洗　礼 …… 19
8　聖　餐 …… 22
9　信仰告白 …… 25
10　ざんげ・悔い改め …… 28
11　教会の暦とシンボル …… 31
12　教会生活 …… 34
13　神によって与えられたいのち …… 37
14　男と女 …… 40
15　結　婚 …… 43
16　信仰のライフサイクル …… 46
17　死と葬儀 …… 49
18　墓と死者の記念 …… 52
19　ほかの宗教 …… 55
20　迷　信 …… 58
21　キリスト教の教派とエキュメニカルな運動 …… 61
22　ルターの宗教改革 …… 64
23　信仰による日常生活 …… 67
24　職業を通しての奉仕 …… 70
25　市民としての責任 …… 73
26　みことばを伝え、隣人に仕える …… 76
付き　聖書の諸文書 …… 79

(1) 神を愛し、隣人を愛する

『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二もこれと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。　（マタイ 22:37-40）

神はこれらの戒めを守るすべての人々に、恵みとさいわいを約束されます。それゆえわれわれもまた、神を愛し、信頼し、神のいましめに従って喜んで行動すべきです。　（ルター・小教理問答書）

神の与えた戒め

イスラエルの民は、エジプトに奴隷として生活していた間、自分たちの生活の基準は、その時々の主人の命令でした。しかし、エジプトを出て自分たちだけの生活をしなくてはならなくなったとき、その基本になる戒めを神によって与えられました。それが十戒です。しかし、彼らはそれを表面的に守ることだけで済ませたり、逆に関連したさまざまな戒めを造ったりしました。実際十戒のほかにも、たくさんの戒めが旧約聖書には示されています。しかし、繰り返し予言者たちが戒めたように、肝心な戒めを与えられた神さまとの生きた関係の中で考えなくてはならないことも、神さまの意思が何であったのかを忘れてしまいました。

十戒は、出エジプト記20：2－17、申命記5：6－21参照。

主イエスの要約

主イエスは、当時の人々が信仰深い人なら当然守るべきだと思っていたことを、別の基準で破られることもありました。そして、すべての戒めの要約は、神を愛し、隣人を愛するということにあると、教えられました。神さまとの生きた関係の中で、その精神に生きることが大切で、表面的に守ることが問題ではないとされた

マタイ22：36－40参照

のです。表面的に戒めを守ろうとすると、自分がどこまで達成することができたかと、心配になります。またほかの人の行動と見比べて、自分で安心したり、嘆いたり、誇ったり、けなしたりすることになります。そういう態度は「律法的」だということになります。

神との関係、人との関係

十戒は初めの神さまとの関係の部分と、それに基づく人との関係の部分に分けられます。それぞれの意味は、小教理問答書の中で見ることができます。ひとつひとつ大切な戒めですが、元の言葉は何分モーセのむかしに与えられた言葉ですから、必ずしも私たちになじまない面もあります。しかし、イエスが説かれたように、神を愛し、隣人を愛するという精神から、これを今の生活の中で考えて行かなくてはなりません。また十戒を与えられたときも、神さまはイスラエルの人々がこれを守るなら、救いを与えるといわれたのではありませんでした。むしろ神さまによって導かれて、エジプトでの生活から脱出できた人々が、自分たちで生活してゆこうとするとき、神さまの意思を考えて、その行動を正しくして行かなくてはならないという意味で、それが与えられたのでした。

主のものとして

同じように、主イエスのゆるしと愛が、人を「主のもの」とするとき、主のものとしてふさわしい生活とはどうしていったらよいのかということになります。イエスが教えられたことを基本として、十戒の精神を理解し、神の前で歩んでゆこうと努めなくてはなりません。しかし戒めはいつも戒めとして働き、それを受ける人間

は、信仰によって救われたものであると同時に、依然として罪の中にあり続けます。したがって、戒めに照らして、実は積極的にそれを破ろうとしていたり、あるいは消極的に守ろうとしていない自分の罪を知らされることになります。そして自分の力によってではなく、主イエスの救いをもう一度たしかに受け取らなくてはならないと考えさせられるのです。そして福音を信じることにより主のものとされ、もう一度主の意思にそって生きようとし始めます。このようにして、十戒を守ることが信仰に入る条件ではありませんが、私たちはいつも神の戒めから離れないで、神さまとの関係を保ちながら生きてゆくことになるのです。

神を畏れ愛することから

十戒は、旧約における最も大切な戒めです。しかし内容は同じであっても、その数え方は一様ではなく、幾つかの数え方があります。出エジプト記の20章1,2節の神さまの自己宣言を第一戒、あるいは第一の言葉としたり、4節の刻んだ像の戒めを独立した戒めとする場合もあります。どのように数えたにしても、その中で初めに神さまとの関係、次に人々の中での生活の基本が示されているのです。ことにルターは教理問答の中で、十戒の第一の戒めによって、私たちが「神を畏れ愛すること」が求められていて、ほかのすべての戒めが、これから出ており、この戒めを実現してゆくために、ほかの一切の戒めがあることを示しています。どのようなことの中でも、神を畏れ愛することが基にあることを考えてゆかなくてはなりません。

＊小教理問答書の十戒の説明を注意して見てみましょう。

(2) 恵みに与かる礼拝

まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。（ヨハネ 4:23）

見よ、ここにあなたは、神の正しい敬いと正しい礼拝であるものをもつのである。すなわち、心が神に対する以外のいかなる慰めも信頼も知らず、神より引き離されることなく、むしろそのためには地上のいっさいのものを断固投げすて、無視しさるべきことを命じられるのである。（ルター・大教理問答書、第一戒）

礼拝にあずかる

神を礼拝するということは、私たちが神さまに対して何かのお勤めをすることではありません。むしろ神さまが与えてくださる恵みを、心を開いて受け取ることです。そのように徹底的な神さまへの信頼が礼拝の意味にほかなりません。ですから「礼拝をささげる」よりも、「礼拝にあずかる」のです。そして礼拝は、ただ個人的に守られるだけでなく、信仰者の交わりの中で起こります。個人的な礼拝を守り、聖書に聞き、祈りをすることは大切ですが、独り善がりになる危険ももっています。信仰生活の中心に、みんなで守る礼拝があります。

神とのやり取り

みんなで守るということは、司式者が代表して神さまに願っておればよいというのではないし、司式者や説教者から会衆にむけて聖書の教えが伝えられるという一方交通なのでもありません。司式者に会衆が応え、会衆が参加してゆくことによって、共同の礼拝が進行します。その全体が広い意味での祈りです。礼拝は神さまと会衆のやりとりの中で進行してゆきます。神

さまのことばが一方的に伝えられ、私たちの側からまたひたすら願いがなされるというのではありません。人間の側からの祈りも、決して神さまに対してすべての必要なことを述べておくというのではないのです。やりとりの中で、人の思いが正され、さまざまな面が考えに入れられてきます。そしてそれは礼拝だけでなく、私たちの信仰生活全体の性格でもあります。

伝えられた信仰を自分のものとして

人間的、個人的に選択されたものにだけよるのでないように、むかしからの洗練された礼拝の言葉が用いられ、また聖書の個所も日課にしたがって選ばれてきました。式文と教会の暦に基づく礼拝は、牧師の個人的な主張によるのではなく、教会として伝えられてきた信仰をできるだけ的確に示そうとします。もちろん一定の式文を用いなければ礼拝ではないというのではありませんが、式文を用いる礼拝には、そういうよい点があります。しかし、参加する人々が、ただ書かれたとおりにたどってゆくだけでは困ります。その意味をわきまえ、いきいきした応答がなされてゆくことが必要です。

共に讃美する

み名による祝福は、どういうお方が私たちの信仰の相手であるかを示し、私たちがそのもとに集まる会衆であることを宣言します。どんな人であっても、一様に神さまの前には罪人にほかなりません。礼拝の初めに私たちは罪のざんげをし、ゆるしの言葉を聞きます。それで終わりでなくて、まさにそれによって神さまとの交わりが始まるのです。キリエ（主よ、憐んでください）の祈りは、マタイ9:27や15:22などに現

れる、直接的で切実な願いの言葉でした。ことにも自分のことだけでなく、みんなのために願います。栄光頌（グロリア）は、主イエス誕生のときに天使たちが歌ったという歌です。それに加えられている言葉は4世紀の信仰者によって造られた賛歌で、十字架と復活昇天の主への願いです。いわば、私たちはこれを歌うことで、毎週降誕祭と受難と復活のメッセージを復習しているわけです。

ルカ2：14参照

みことばを中心に

その日の特別の祈りは、その日の福音書の主題にそってなされます。聖書の日課は、だいたい旧約聖書から、また使徒たちの手紙から、そして福音書から読まれます。福音書は、特別な祭日の期間でなければ、マタイ、マルコ、ルカのいずれかの福音書を土台にして、その年の日課が選ばれています。聖書に基づいて、みことばの説きあかしとての説教があります。みことばへの応答として、ニケヤ信条か使徒信条によって、信仰の告白がなされます。それは古代からの信仰者たちが言い表してきた信仰です。応答の形の一つとして奉献があります。感謝と奉仕のしるしとして会衆の献金がなされます。歌われる奉献唱は、詩編51編の言葉で、奉献といいながら、私たちが神さまから捨てられないこと、むしろ喜んで仕える心が与えられるよう願っています。ヌンク・ディミティスは、ルカ2:29以下に記されたシメオンの歌です。救い主に会うまでは死なないという約束を受けていた彼が、幼子イエスを抱いて、もういつこの世から去ってもよいと、喜び歌ったものです。それがまた、私たちの信仰でもなければなりません。

＊礼拝式文のそれぞれの部分の意味を考えてみましょう。

(3) 主に向かって歌う

詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。（エフェソ 5:19）

魂も神のことばを堅く信じるならば、魂は神を真実で、義で、正しいかたであると考え、そうすることによって、自分がなしうる最大の栄誉を神に帰しているのである。（ルター「キリスト者の自由」）

神を讃美する

礼拝で私たちは、神を呼び求め、祈り、ほめたたえ、感謝します。礼拝に参加するのは、しなくてはならないお勤めではなくて、恵みにあずかる喜びの行為です。その喜ばしいおとずれを聞き分けるのが、私たちの信仰です。そして神を神としてあがめ、神さまに最大の栄誉を帰することが、私たちの神賛美にほかなりません。しかも私たちの賛美や祈りもまた、御霊の働きによって与えられます。祈りや讃美歌の言葉をとおして、私たちは神さまに語りかけ、逆に神さまの語りかけを聞くことができます。

讃美歌の働き

歌や歌の曲は、私たちの心を慰めたり、励ましたりします。リズムに乗って、私たちにその言葉を覚えさせます。「懐(なつ)かしのメロディ」などが、私たちの思いを遠い過去にいざなったりします。私たちは、その言葉に感動し、直接自分のことでなくても思わず涙をもよおしたりさえします。神さまへの賛美の歌は、同じような働きをしました。「われ今まぶねのかたえに立ち」と、礼拝堂の中で歌っていても何の違和感をもちません。神さまのみわざを思い返させ、そのみことばを心に刻み、あたかも自分自身が歌われている出来事の中にいるかのように、神

さまとの出会いを感じさせます。

歌い継がれた信仰

私たちの讃美歌集には、むかしから現代に至るまでのたくさんの信仰者たちの賛美の歌が収められています。その言葉が何を語っているかを心して、歌ってゆかなくてはなりません。旧約の詩編はそうした賛美の歌でした。そしてそれはただ人の心の感情を言い表すだけでなく、神さまのみわざを語り伝えています。新約時代にもそれが受け継がれました。「詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい」（コロサイ3:16）とパウロも言います。そして新約聖書の中にも、おそらく初代教会の讃美歌として歌われていたのではないかと思われる言葉が残されています。歌として歌われることによって、ただ聖書の言葉をリズムにのせて覚えさせるというだけでなく、また自分たちの感情のたかぶりをうながすというだけでもなく、歌う人々も共々に神さまを賛美してゆく思いに巻き込みます。しかもその作者たちの中には、理屈としては必ずしもその信仰の立場に賛成できないような人もあり得ます。直接的な神さまへの賛美には、意見の相違を超えて通じるものが含まれているからです。長い間歌い継がれてきた讃美歌には、きっとそういう要素が認められるに違いありません。

例えばフィリピ2：6－11，1テモテ3：16，コロサイ1：15－20，エフェソ5：14など。

折りにかなって

ことに、同じ信仰の流れに立つ作者たちの作品には、私たちの心により親しく感じるものがあります。それがどういう思いを込めて歌いだされたものかを考えるき、一語一語の意味がいっそう深く感じられます。またその内容も、曲

も、神さまを賛美するのにふさわしいものであることが求められます。また私たちが口ずさむ歌が、自分の気持ちの表現にも、共に叫び出す願いや感動にも、仕事のリズムを取ることなどにも、いろいろな場合にそれに見合った歌が浮かんでくるように、讃美歌の中にもそれぞれの時に適したものがあります。その時々に、ふさわしいものを歌いだしてゆけるようにしたいものです。そのことによって、それぞれ人の好みはあっても、偏(かたよ)らない信仰の態度をもってゆくことができます。

いきいきとした礼拝

そのような意味で讃美歌は、自分の気にいったものというだけでなく、その中に込められた先達の信仰と、それを歌い継いできた信仰者たちの思いを考えながら、歌われなくてはなりません。ある人は、讃美歌は会衆がみんなでする福音の宣教だとさえ言います。神さまへの賛美の言葉は、同時にみことばを自分自身に言い聞かせ、また人々に宣べきかせる言葉でもあります。讃美歌は、私たちの信仰にとってのいわば「携帯口糧(こうりょう)」(身につけてゆく非常食)だと言った人もあります。たとえ聖書を手にしていない時でも、心に覚えた讃美歌の言葉は、私たちを支えてくれるからです。讃美歌がいっしょうけんめい歌われている教会は、またあらゆることに活動的な教会であるともいわれます。それは私たちの礼拝についてもいえることです。いきいきとした言葉が交互に交わされ、したがってまた全体的にリズムをもって進んでゆく礼拝となります。

＊好きな讃美歌の歌詞を、一語一語注意して、その意味を考えてみましょう。

(4) 私にとっての神のことば

神は、かつては預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖たちに語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。（ヘブライ 1:1,2）

（福音）は罪に対抗して、一様でない、さまざまな方法で忠告と助けを与える。‥第一には口ずからのことばによってであって、これによって福音本来の職務である罪のゆるしが、全世界に説教される。第二には洗礼をとおして、第三には聖壇の聖なる礼典をとおして、第四にはかぎの権能をとおし、そしてまた兄弟相互の会話や慰めによってである。（シュマルカルデン条項 3-4）

神の語りかけとしての聖書

主イエスは、その説教によって神さまのみ心を教えてくださっただけでなく、その生涯、ことに十字架の死と復活によって、私たちに対する神の愛のことばを伝えてくださいました。その主を証しする聖書を通して、また聖書の説き明かしである説教や聖書の学びを通して、神さまは私たちに語りかけてくださいます。したがって、聖書をただ歴史的に、あるいは文学的な興味によって読むのではなく、私に主イエスをもたらすみことばとして、読み、また聞いてゆくことが必要です。主イエスの時代の背景を知ることは、具体的な状況の中で働かれた主を考えるために大切です。しかし、ただ過去の歴史の状況の中だけでそのみわざを考えてはなりません。むしろ聖書がもともと信仰を伝えるために書かれ、保たれてきたことを覚えなくてはなりません。

叙述と意味の脈絡

聖書の言葉は、その内容の中心である主イエスの出来事に照らして、前後の関係を見ながら

理解してゆくようにします。自分の気に入った語句だけを抜き出して、その前後関係を見ないと、全く違った意味で受け取ってしまうこともあります。もともと旧約聖書はヘブライ語で、新約聖書はギリシャ語で書かれていますから、現代の日本語ではぴったり言い表せない場合もあります。違う訳や外国語の聖書を参考にすると、翻訳に苦労した箇所が分かり、その意味もつかめてきます。新約聖書のいろいろな箇所は旧約の歴史を背景にしていますし、同じようなことが違う箇所でも言われている場合もあるので、引照付きの聖書で関係の箇所を見ることはたいへん助けになります。聖書の語句索引も、理解のための有用な道具です。聖書の流れに添って読んでゆくと共に、そこで見いだされた課題を、関連する聖書の箇所によって考えてゆくことは、縦と横の糸を組み合わせるように、両方とも大事です。分かりきっていると思っていることが、ふだんは気づかない深い意味をもっていることもしばしばあります。

自分の生活への脈絡

しかし、聖書自体の脈絡で見てゆくだけでなく、それを今私たちに語られる神のことばとして、自分たちの問題に関連して考えることがもう一つの課題です。もちろん自分の問題に、直接的な指示を与えるような聖書の言葉に出会うこともあるかもしれません。しかし、自分に都合のよい言葉を見つけようとするのでなく、むしろ問題に対する考え方を教えられるのです。説教や聖書研究などを通して、教会の交わりの中で学ぶのは、代々の信仰者たちの理解やほかの信仰者の受け取り方を考え、独りよがりな理

解にならないようにするためです。毎日の聖書日課などによって、すこしづつ読んで味わうことも、私たちの信仰の成長を助けます。

聖書の説き明かしとしての説教

説教や奨励は、聖書に基づいて、聖書の説き明かしとしてなされます。それを、自分たちに対する神さまの語りかけとして聞いてゆくことが大切です。しかし、人の言葉の伝達には、思わぬ間違いや問題が混じることもあります。全体の筋道に照らして、間違いのないように受け取ってゆくように努めなくてはなりません。互いに語り合うことによって、自分の理解が正されたり、違った側面を教えられたりします。聞いたことが、聖書の意図と違うように思われたときは、語った人にあとでよく聞いてみることです。自分自身が間違って受けとっていたかもしれません。よりよい理解とみことばの説き明かしのためには、聴衆と説教者、聴衆相互がいつも対話し、共に主に聞いてゆく姿勢をもっていることが必要なのです。その意味では、説教も説教者だけの仕事ではなくて、教会全体が作り上げるものと言えます。自分の考えに合っていたと安心しないで、神のことばは自分に慰めを与えるだけでなく、挑戦する面もあることを考えなくてはなりません。ただ聞くだけでなくて、それを具体化するように努めます。もちろん一時的な感情の刺激や高揚を求めるのではなく、聖書を基として考えてゆくようにしなくてはなりません。そして、信じるすべての者がまた、相互の会話や証しの行為の中で、みことばを伝えてゆく責任と名誉を与えられているのです。

＊現在愛唱している聖句がありますか。
それをなぜ愛唱しているのでしょうか。

(5) 主の祈り

あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。だからこう祈りなさい。（マタイ 6:8, 9）

神は、これによって、神がわれわれのまことの父であり、われわれが神のまことの子であることを信じ、ちょうど愛する子どもたちが、その愛する父に求めるように、全き信頼と安心をもって神に求めることをおすすめになります。（ルター・小教理問答書）

主に属する者の祈り

いつでも神を呼び求めるのは、信仰生活の姿ですが、イスラエルの有名な信仰の指導者たちは、自分たちの集団に特別な祈りの文句を弟子たちに教えました。主イエスの弟子たちも、そのような祈りの言葉を教えてくださるように願いました。それに応えて教えられたのが「主の祈り」です。ですから主の祈りを祈ることは、主の弟子であることのしるしでもあります。古い時代には、洗礼を受けて初めて、この祈りの言葉が教えられたと言います。マタイとルカでは言葉が少し違いますが、おそらくもとの言葉を翻訳する過程で違いが出たと思われます。また早くから最後の結びとして「国と力と栄えとは」の一句が加えられて、用いられました。

ルカ 11：1以下参照

マタイ6：9－13、ルカ11：2－4参照

与えられた祈り

祈りは、神さまへの信頼をもって、私たちの心にある求めを自由に言い表してゆけばよいのですが、主の祈りはいわばそのお手本ということができます。もちろん主イエスの教えだからといって、ただ呪文のように繰り返せばよいわけではありません。第一に、その意味を考えながら、心をこめて祈ることが必要です。それは私たちが何を祈ったらよいかを示しています。

私たちが祈ることをゆるし、それをかなえることを約束してくださったばかりでなく、祈る心も、祈る言葉も、神さまの方から与えてくださいました。第二に、それを模範として、私たちの自由な祈りもまた、神さまにむかって、信仰をもってささげられます。私たちの信仰のしるしが、主のみ名による祈りとなります。

まず神のみわざについて祈る

主の祈りの初めの部分は、自分のことよりも神のみわざについての祈りです。ルターは、たとえ私たちが祈らなくても、神のみ名はきよく、そのみ国はやってくるものだと言います。しかし、そのような神さまの働きの中に、私たちも入れられるようにと願うのです。私たちはどうかすると、熱心に祈ったから聞かれたのだと思い、祈りが足らなかったから事が成就しなかったなどと考えます。確かに主ご自身も、しつように求めるようにと教えられました。しかし、人のしつような求めに応えて神が与えようとしておられるのは、聖霊だと教えておられます。ひとつひとつの事柄の成就よりも、いつも神さまとの交わりの中に生きてゆけるように、求めてゆかなくてはなりません。

ルカ11：5以下参照

日ごとの糧

「日ごとの食物」「必要な糧（かて）」（新共同訳）を与えてくださいという願いの「糧」の中に、ルターは肉体の栄養や生活になくてはならないすべてのものが含まれているとしています。そして食物や飲み物、衣服、財産、夫婦、子供、支配者、政府、気候、平和、健康など、あらゆることをあげています。信仰的な祈りにふさわしいようにと、自分で精神的なことだけに願いを

限定したりする必要はないのです。そのような具体的なものについての願いを通しても、神はご自身を与えてくださいます。すべてのものを造り、支配しておられるお方への祈りですから、私たちはどんなものについても願い求めることができます。また求めるだけでなく、すでに与えられている現在の生活についても、それを神さまの恵みとして、感謝してゆくことが必要です。「日ごとの糧」あるいは「必要な糧」を、「来るべき日の糧」、すなわち終末の日に救い主と共にあずかることのできる食卓の食べ物を指すと理解し、それを今日すでに味わうことを許してくださるように祈るのであり、その意味で主の祈りが聖餐式の中で祈られてきているのだと考える人もあります。どの意味が正しいというよりも、こうしたニュアンスを持つ祈りの言葉として、覚えてゆきたいものです。

私たちがゆるすように

自分に負い目のある人をゆるしたように、自分の負い目もゆるされるようにという願いは、しばしば私たちの心に重荷を負わせます。私たちは、なかなか人をゆるそうとはしていないからです。しかしマタイの文では「ゆるしましたように」(6:12) ですが、ルカでは「ゆるしますから」(11:4) となっているのは、もともと「必ずそうします」という気持ちの言葉が、二様に訳されたのだろうと考えられます。そこでむしろ、マタイ18:23以下にある譬えを合わせて考えることが必要です。私たちは、このように祈るににふさわしい資格をもっているわけではありませんが、恵みによって、人々をもゆるすようにされてゆく決意を持ちたいのです。

＊小教理問答書で、主の祈りの中の、ここに挙げられていない句の意味も学びましょう。

(6) 恵みへの応答として

彼らは力に応じて、また力以上に、自分から進んで、聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願い出たのでした。　（2コリント8:3,4）

われわれは、われわれに対する父としての神の情と、あふれるばかりの愛とをうかがい知ることができるのであり、またそれによって、われわれの心は温められ、燃やされて、感謝の念を生じ、そうしたすべての賜物を神の栄光と讃美のために用いるようになるであろう。

（ルター・大教理問答書、使徒信条1.）

奉仕に参加する

「交わり」は、教会の基本的な性格の一つです。しかし、交わりと訳された言葉（コイノニア）は、もともと「あずかる」とか「参加する」とかいう意味にも用いられています。表面的なつきあいというだけでなくて、キリストのいのちにあずかることによって、お互いもまた結び合わされ、教会の使命とその働きに共に参加してゆくことを含んでいます。そういう交わりに加わることが恵みにほかなりません。そのような筋道の中で、私たちがどのように力を合わせて奉仕をし、また財をささげてゆくかということも考えられます。

喜び仕える霊

礼拝の中で、みことばに対する応答として、奉献があり、奉献唱が歌われます。奉献の祈りの中にも示されているように、これはただ献金の部というのではなくて、自分自身をささげる思いを表して、そのしるしとしての献金があるのです。奉献唱の言葉が取られている詩編51編（:19）には、「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊」とあります。一番大切な献げ物は、自分

を誇らず、ひたすら神さまの恵みを求める心にほかなりません。「自由の霊によって支えてください」(:14) という「自由の霊」は、喜んで仕える心を指しています。私たちが何かをささげるというのは、自分の手に持っている何かを、いくらか差し上げるというのではなく、むしろ手を広げて恵みを受け、自分自身が神のみわざに参加してゆくことにほかなりません。献金はそのしるしの一つです。

教会の使命のために

教会とその働きは、信徒のささげるものによって支えらえています。初代教会の人々は、互いの交わりの中で生活に困っている人を助け、また伝道を進めてゆくために必要な財をささげました。会員が不断に献げるものによって働くのが、生きた教会の基本の姿です。それは福音を信じる心の実際面での現れのひとつです。

わが国の教会は、まず海外の教会の信徒たちの献金によって伝道が始められ、支えられてきました。しかしどんなに小さくても、私たちも自分の力を働かせなくてはなりません。幸いある程度成長した私たちの教会の働きは、自らの献金によって支えられるようになってきましたが、それが自分たちの教会を維持することだけに向けられてはなりません。教会が維持されるのは、教会の働きが十分になされるためです。そして教会の働きは、伝道、教育、奉仕の分野にわたって、いつも広げられなくてはなりません。実際には、自分の教会を維持することも、十分にはできていないこともあります。また、本来自分で支えることの難しいような性格の働きもあります。しかしどんな時でも、奉仕する

心を忘れないように努めることが必要です。

神の働きに与かる

献金は神さまの恵みに期待して、いわばそれを買うためにささげるものではありません。つねに進み、つねに新しい展開をする神さまの働きに、私たちも参加することを許される恵みです。もちろん教会の維持や牧師を支えるための費用も、伝道活動の一環です。しかし、それに止まらず、さらに具体的で、積極的な働きが行われるように、自分たちの力も、財も、合わせてゆくように努めましょう。

ささげ得るものを

信仰を持たない子どもの世話になっていて、思うような献金もできないし、ほかの人のように積極的な働きをすることも無理だからと言って、日曜日の朝教会で使うスリッパをきれいにする仕事を、何年も黙って努めた老婦人がいました。私たちは、だれもが同じように献金をしたり、奉仕したりすることができるわけではありません。しかし、その婦人の例のように、いろいろな仕方で努める道はあるでしょう。「各自不承不承ではなく、強制されてでもなく、心に決めたとおりにしなさい」(2コリント9:7)とパウロも言っています。旧約の民は収穫物の十分の一を、神のものとしてささげました。私たちはそのような律法のもとにいるわけではありませんし、それだけのことに限る必要もないのですが、それは具体的な目安と言ってよいでしょう。もちろん、教会での献金だけでなく、この世における生活を積極的にしてゆくこともまた、神と人とに仕える道です。

＊私たちの教会の献金はどのように用いられているのでしょうか。

(7) 洗　礼

わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。（ローマ 6:4）

それは、罪にゆるしをもたらし、死と悪魔から救い出し、信じるすべての者に、永遠の救いを与えます。神のみことばと約束とが宣べているとおりです。（ルター・小教理問答書）

神の民となる

洗礼は、それを受ける人が神の国の民として受け入れられ、教会の会員となるために、神によって定められ、キリストが命じたもうた礼典（サクラメント）の一つです。聖礼典は、神さまがその確かな恵みの保証として、またしるしとして、私たちに与えてくださった行為です。私たちの信仰と決意の表明というだけでなく、神さまの命令であり、約束です。

神さまの恵みを保証する、具体的なしるしですから、「恵みの手段」とも呼ばれました。信仰はその恵みを自分に与えられたものとして受け取ります。しかし、私たちの信仰が完全にならないと、受け取ることができないものではありません。むしろ洗礼が信仰を目覚めさせ、支えます。私たちの信仰がなお不完全で、十分な知識も持っていなくても、私たちが確かに神さまとの関係の中で生きてゆこうとするなら、洗礼を受けることができます。実際だれが完全な信仰をもったと言えるでしょう。もちろん、この世にあってキリスト者として生活してゆくために必要な、信仰の基本的な問題については、その人なりに学んでゆくことが求められます。そ

れは、教会生活に参加してゆくことの中で、また教理問答の学びなどによってなされます。

恵みの保証

洗礼は神さまの恵みの保証であって、私たちが恵みを得るための条件ではありません。機械的に洗礼を受けさえすれば、救われるというのでもありません。そこに約束された神のことばを信じる信仰が必要です。たしかな神さまの約束ですから、一度洗礼を受けた人は、何度も繰り返す必要はありません。しかし、神さまの側では確かであっても、人の側では絶えず迷い出ようとしますから、いつも神さまの約束に立ち返ってくることが必要です。つまり、その内容は日ごとに繰り返されるのです。

洗礼を受けようとする心

もし洗礼を受けていなかったとしても、神さまの恵みに対する信頼があれば、その人には救いの望みがあります。救いを決めるのは神さまですから、人が勝手に判断してはなりません。しかし、この世で信仰の生活を続けてゆくためには、神さまの恵みのしるしである洗礼や聖餐に支えられてゆくことが必要です。自分の考えが基でなく、相手である神さまへの信頼が、主の命令にしたがって、洗礼を受けさせます。

信仰をもって洗礼を受けることを望んでも、牧師が近くにおられず、病気で危ないような時には、キリスト者ならだれでも、その人に洗礼をほどこすことができます。しかし、それは教会でおおやけに報告されなくてはなりません。また万一洗礼を受け損なったといっても、それでその人が滅びてしまうわけではないのですから、いつも執り成し祈ることが必要です。

三位一体のみ名へ

マタイ28：19, 20

洗礼は、「父と子と聖霊のみ名によって」その人に水を注ぐことで与えられます。「み名によって」はただ口で神さまの名を呼ぶというだけでなく、その人が信仰によって主イエスに結ばれ、主のものとなることを意味しています。洗礼において、キリストと共に死に、また共に復活させられるという意味は、全身を水にひたす、いわゆる浸礼によって、よりよく表されます。しかし、復活の主が命じられた洗礼は、イエスご自身が洗礼者ヨハネから受けられた洗礼とは意味が違いますし、ヨルダン川のような場所でなければならないというわけでもありません。多くの教会では、会堂での礼拝の中で、水を注いで洗礼をほどこすことを習慣とし、それを認めてきました。またほかの教会で受けた洗礼も、三位一体の神のみ名による洗礼は、そのまま有効な洗礼として認め合うのが普通です。

子どもたちの洗礼

自分で信仰を告白した者だけでなく、信仰的な環境に育てられる子どもたちにも、洗礼がほどこされます。「私たちは幼児が信じると考え、またそう希望して連れてき、神がこれに信仰を与えたもうように祈願する。けれども、それに基づいて洗礼をほどこすのではない。ただ神が命じたもうたことであるという事実にのみ基づいて、ほどこすのである」と大教理問答書は述べています。子どもたちも、洗礼によって神に委ねられ、受け入れられます。もちろん両親や教保も、教会も、受洗した子どもが自らの信仰告白に至るように、養育する責任を負ってゆくことになります。

＊小教理問答書や式文によって、洗礼の詳細とその意味をしらべてみましょう。

(8) 聖　餐

あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。　　（1コリント 11:26）

それは、われわれの主イエス・キリストの、まことの肉、まことの血であって、われわれキリスト者が、パンとぶどう酒とともに食し、飲むようにと、キリストご自身によって設定されたものです。

（ルター・小教理問答書）

聖餐の意味すること

洗礼が神の約束の確かさを示して、一度限りのものであるのに対して、聖餐は繰り返し与えられて、私たちの信仰を養います。それはもともと主イエスが弟子たちと共にされた最後の晩餐に基づいています。主ご自身が、「わたしの記念として」（ルカ22:19, Ⅰコリント11:24）これを行いなさいと命じられました。しかもそれは、イスラエルの民がエジプトから出発するとき、神さまの命令で小羊をほふって食した出来事を覚える「過ぎ越しの食事」として守られました。旅立ちの支度をして食べた食事です。主イエスは、十字架と復活という私たちの罪のゆるしと救いをなし遂げる出来事への出発の食事とされました。しかし、復活の後にも、主は弟子たちに現れて、食事の席でパンを割き、彼らの目を開いてくださいました。救い主と共に食卓につくというのは、当時の人々が心に描いていた、神の国での救いにあずかる姿でもありました。そういういろいろな側面をも含んで、主イエスの血による「新しい契約」（ルカ22:20）として与えられました。この新しい契約という言葉が、「新約」の直接の意味です。そこで私たちも、聖餐において主ご自身を受け、その死と

マタイ 26：17 以下

出エジプト記 12：11

ルカ 24：30－31

復活にあずかり、主が来られる時まで、信仰を支えられてゆきます。

聖餐にあずかる

聖餐にあずかる者は「自分をよく確かめたうえ」で、「主の体のことをわきまえ」て（1コリント11:28,29）、これにあずかることが大切だとパウロは注意しています。しかしある意味では、自分がふさわしいと考えるよりも、ふさわしくないと思う者の方が、本当にふさわしいとも言えます。自分の信仰に自信を持つことよりも、ひたすら主の憐れみに依り頼もうとする方がより信仰的であるかもしれないからです。聖餐にあずかるのは、罪深い者に対するゆるしと、永遠のいのちの望みにあずかろうとするのであって、自分の信仰への報奨を得ようとするのではありません。また神のみ前に自分の罪を認め、そのゆるしが主の十字架の贖（あがな）いにあると信じるのでなければ意味がないことになります。そして罪のゆるしがあるところに、いのちと祝福もあります。

パンとぶどう酒

聖餐式のパンとぶどう酒において、主イエスご自身が与えられます。パンが魔術的にキリストのどこかの部分に変化するとか、ぶどう酒が血に変わったというのではありません。しかし、このパンとぶどう酒と共に、それをとおして、主イエスが私たちに提供されるのです。パンはパンであり、ぶどう酒はぶどう酒ですが、信仰者たちが聖餐を守っているとき、主がその中にいてくださいます。聖餐式の後まで、特別なものであり続けるわけではありませんが、聖餐式に用いられたもの、また用いられる用具は

大切にまた清潔に保つようにします。

私に対する恵み

「あなたがたのために」（ルカ22:19,20）として与えられる聖餐の恵みを、自分のものとして受け取るのは、私たちの信仰です。主のみことばを確かに信じることが、恵みを受けるのにふさわしい者とします。しかしまた、私たちの個人的な理解を超えて、主イエスの恵みの確かさを示すのが、聖餐ということができます。教派によって考えや習慣が多少違う場合もありますが、私たちの教会では、教理についての考えが違っていたり、ほかのキリスト教会に属する人であっても、主イエスへの信仰を持ち、聖餐をとおして主ご自身が与えられることを信じる人は、共に聖餐の交わりに加わることができます。また洗礼を受けた子どもたちも、主の恵みを教えられ、その年齢に応じた信仰を示すことによって、聖餐にあずかり、その信仰を養われて、主にある交わりの中に支えられます。

信仰をもって受ける

しかし、聖餐は魔術的なものではなくて、信仰をもって受け取られるものですから、これにあずかるのは信仰告白の行為でもあります。まだ洗礼を受けていない人にも、祝福が与えられる場合もありますが、それでよしとしないで、信仰告白をして洗礼を受け、共に聖餐の恵みにあずかることができるようにしましょう。恵みの確かさと私たちの信仰の告白とが、いつも対応し、結びあってゆくのです。そして私たちが自分のために与えられる主を、信仰をもって受け取るように、主はご自身を私たちに渡し、委ねられます。

＊聖餐について、小教理問答書や式文によって、さらにその意味を学びましょう。

(9) 信仰告白

「だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。」

（マタイ 10:32）

信仰（使徒信条）はわれわれが神から期待し、受け取らねばならないいっさいのものを示してくれる。手短かに言えば、神を徹底的に知ることを教えてくれるのである。（ルター・大教理問答書）

信仰の告白

「告白」という言葉は、ふつうほかの人には言うまいと心に隠していたことを打ち明け、知らせることで、多く罪や悪行の告白ということに用いられます。けれども、信仰「告白」と言うときの「告白」はイエスが主であることを公に言い表し、神を讃美することにほかなりません。主イエスが私たちを仲間として認め、言い表してくださるので、私たちも主を自分の助け主として言い表すのです。自分のことを何者とするのかと、主イエスが弟子たちにお尋ねになったとき、「あなたはメシア（キリスト）、生ける神の子です」とペトロは弟子たちを代表して答えました。それがまさに弟子たちの最初の信仰告白であったということができます。

ローマ10：9以下

マタイ10：32参照

マタイ16：15以下参照

すると イエスは「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」と言われました。その信仰は、彼らの考えに基づくというよりは、神さまご自身が示してくださったことだと言われたのです。しかもそれによって、ペトロは自分がどういう者であるのかを、主によって教えられました。自分のキリスト・イエスとの関係を言い表すことによって、自分自身

がどういう者であるかを主によって示されたのです。

洗礼の際の告白

私たちの信仰告白は、いつもそのような性格をもっています。自分の主体的な言い表しですが、それは主イエスの側からの私についての言い表しを支えにしています。しかも、ただ自分の考えというのではなくて、あの使徒たちが聖書において告白している信仰に私たちも加えられるのです。礼拝の中で共に告白し、洗礼のときに確かめられる「使徒信条」の信仰は、初代の教会の人々から伝えられた信仰にほかなりません。12使徒が、いろいろな地方に伝道に散らされる前に、一句づつ持ち寄ってこれをつくったという伝承が長い間信じられていました。しかし、それは歴史的な根拠があるわけでなく、次第に今の形に成長したものと考えられていますが、しかしすでに２世紀には大体の形が伝えられているのであり、内容は使徒的な信仰を表しているとして、今もこれを「使徒」信条と呼んでいます。もちろんそれは、聖書に基づいており、ほとんど聖書の言葉を合わせたものでもあります。

ニケヤ会議の告白

礼拝で信仰告白として用いられるもう一つのものは、「ニケヤ信条」です。これは紀元４世紀に迫害の時代を通り抜けた教会が、自分たちの信仰の一致を確かめるために当時の全世界の代表たちが集まって、言い表した信仰箇条で、世界的に言えば使徒信条よりも広い基盤をもっているものです。

しかし、そのようないわゆる「信条」だけで

なくさまざまな形で教会の信仰は伝えられています。宗教改革の時、ルターは「アタナシウス信条」や「テ・デウム」をも、基本的な信仰告白として考えていますが、それらは礼拝の中で歌われていた式文の一部として用いられていたものです。

テ・デウムの抄訳は教会讃美歌160参照

宗教改革の信仰告白

使徒信条、ニケヤ信条、アタナシウス信条のいわゆる基本信条だけでなく、宗教改革の時に福音的な信仰の告白として最初に公にされたアウグスブルクの信仰告白書や、ルターの大教理問答書、小教理問答書を含む六つの文書（アウグスブルク信仰告白の弁証、シュマルカルデン条項、和協信条がこれに加わる）がルーテル教会の信仰告白書に収められ、世界のルーテル教会に共通する信仰の基本になりました。特定の地域の教会の信仰宣言が、それに加えられる場合もあります。これらのものは、単に教理的な議論に決着を着けたというだけでなく、教会生活の中で生きている信仰の言い表しです。

信仰に加えられる

自分が主イエスへの信仰を言い表すのは、実は逆に主イエスが私を仲間として言い表してくださるだけでなく、代々の信仰者たちの信仰に加えられることでもあります。それは、信仰を曲げようとする力に対して、その時々に聖書がどのように理解され、解釈されて来たかという信仰の証言であり、解説です。洗礼に際して尋ねられるのは、使徒信条ですが、そのために教理問答書も学びます。礼拝で共にニケヤ信条も告白します。いつもより深く信仰を考えてゆくように努めてゆかなくてはならないのです。

＊私たちの身近にある信仰告白的な言い表しを考えてみましょう。

(10) ざんげ、悔い改め

自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。

（Ⅰヨハネ1:9）

ざんげは二つの部分からなっています。一つは罪の告白であり、他は、赦免の宣言、あるいはゆるしを、神ご自身からのように、ざんげを聞く牧師からうけ、しかも疑うことなく、むしろ天におられる神のみ前に、そのことによって罪がゆるされていることを、かたく信じることです。（ルター・小教理問答書）

悔い改め

主イエスが「悔い改めよ」（マタイ4:17）と宣教を始められたのは、信じる者が生涯悔い改めなくてはならないことを示されたのだということを、ルターは宗教改革の具体的な発端となった九十五箇条の提題の最初に述べました。それは当時の教会における改悛（かいしゅん）の秘跡（ひせき）に与かることではなく、真実に心を神へと転換して、生きようとすることを意味しています。しかも内的に心で悔いるだけでなく、そういう生活を改めるようにしていかなくてはならないのです。

神の前での悔い

悔いるということは、心に自分の失敗を悔やむだけでありません。神さまの前にそれを認めて、ゆるしを願うことです。しかし、教会にゆくと、ざんげをしなくてはならないからいやだというようなことを考える人もいます。自分の犯した罪をいちいち言わなくてはならないと考え、それに躓（つまず）きを感じているわけです。そのこと自体は少し問題です。自分の罪を認めることができなかったり、自分の弱みを人に知られたくないと思っているからです。しかし、私た

ちの教会では、すべての者が神のみ前に罪人であることを告白しますが、必ずしも個人的にざんげをすることを求るわけではありません。

個人的なざんげ

ルターは、生涯個人的なざんげを実行し、それが大きな慰めであることを述べています。心に感じている罪による不安を取り除いてくれるからです。そして、ある時期には、洗礼や聖餐と同じように、聖礼典の一つであるかのように扱いました。それはまた、「天の国の鍵」（マタイ16:19）の権威に対応していると考えています。悩みの中にある良心にとっては、大切な行為でありました。今日でも、その重要性が唱えられています。

もちろん自分の犯した罪によって、苦しみを感じていないならば、省みて無理に罪を見いだそうとしたり、不安になったりすることはありません。しかし実は、自分に罪を認めることがないというのは、かえって問題です。十戒を初めとする聖書の戒めを、表面的にでなく心から守ってきたかと問われるなら、だれでも罪の中にあることを思わずにおられないはずだからです。何を基準にして、どういう良心をもって考えるかということがまず問題なのです。

すべての人のざんげ

中世におけるざんげ（改悛）が、問題とされたのは、言い表さなくてはならない罪が、当然自分自身が感じている問題でしかないわけであり、また犯した罪がどういうものであったかによって、罪の大小が計られ、償いの行為が定められたからです。もともと神さまとの関係において、的外れなことがすべて罪なのです。自分

が意識しているかどうかに関わらず、進んで犯したことも、なすべくしてしなかったことも含まれます。神さまとの関係と隣人との関わりの中での間違った行為というだけでなくて、すべての自分勝手な思いや、不安や孤独さ、あるいは死の恐れも、すべて罪の結果です。そう考えると、私たちが生きていること自体にまつわるすべてのことが罪の中に含まれることになります。私たちの教会では、特に必要な悩みをもった魂のためには個人のざんげを、むしろ恵みの手段として考え、ふつうは礼拝の中でみんなの者が一緒にざんげするようにしてきました。したがってどのようなざんげが求められるかについては、通常礼拝式の初めの部分に、その例が示されています。心からの思いが込められていなくてはなりませんが、神さまへの不信頼とあらゆる自己中心的な思い、思慮を欠いた言動などについて、一般的な言葉で言い表します。

ゆるしの宣言

そして、罪の告白をどのようにするかということ以上に、神のゆるしの宣言を聞くことが重視されました。主イエスは、信じる者に「あなたの罪は赦される」（マルコ2:5）と宣言されただけでなく、ご自身の十字架のあがないによって、すべての信仰者たちが赦しを受け、さらにその力をほかの人たちのために行使することができるようにしてくださいました。罪のゆるしは、喜びをもって主に仕える心を与えます。だから礼拝でも、まずざんげとゆるしがあるという順序になっています。罪のゆるしのあるところにいのちと祝福もあります。それは私たちの生活においても同様です。

マタイ18：18参照

＊礼拝式文の罪の告白の文章を、自らのこととして考えてみましょう。

(11) 教会の暦とシンボル

あなたがたは食べ物や飲み物のこと、また、祭りや新月や安息日のことでだれにも批評されてはなりません。これらは、やがて来るものの影にすぎず、実体はキリストにあります。　（コロサイ 2:16）

教会の中で秩序正しくことが行われるために、定めをつくることができる。しかし、それによって神の恵みを得、また罪のつぐないをし、あるいはこのようなことが神に仕えるために必要なことと主張し、これを破るのはたとえ他の人につまずきを与えないでも罪を犯すのであると考えて、良心を束縛するためではない。

（アウグスブルク信仰告白28条）

安息日から主日に

旧約時代には毎週の安息日をはじめ、守るべき祝祭日がありました。しかし、キリスト教会においては、古い律法は廃止され、次第に新しい習慣が生まれました。新約聖書の時代にすでに、安息日（土曜）よりも主の復活の日、日曜が「主の日」（黙示録1:10）とよばれて重視され、この日に礼拝を守るようになりました。復活祭の日や主の降誕を祝う日も、4世紀には共通に守られるようになりました。中世には、多くの祝祭日が置かれましたが、ルターは「神はキリスト教会においては、日曜日以外にはいかなる祭日もないことを望まれた」（善きわざ）とさえ言って、主日が中心であることを主張しています。それはただ古い安息日が日曜日に変わったというだけでなく、新しい考えに基づいています。どの日でもそれ自体がほかの日にまさっているということはありませんが、歴史を支配される神のみわざを覚え、時を定めて主の出来事を自分たちに当てはめて思い起こすように、教会の暦が守られるようになりました。

出来事の記念

主の十字架と復活の出来事は、ユダヤ人の過越祭の時期に起こりましたが、その日を現在の太陽暦のどこに位置づけるかについては議論がありました。出来事は確かで、大体の時期も明らかではありますが、暦の違いによって、今日守っている復活祭は、便宜的に春分のあとの最初の満月の次の日曜日に定められているだけです。クリスマスも主の誕生日ではなくて、降誕を祝う日として定められました。そういう余裕を見ながら、しかもこうした祝日によって、福音の真理が年ごとに新たに記念されてきたことを大切に考えることが必要です。

教会暦の大要

教会の暦は、降誕への備えをする待降節から始まります。クリスマスを12月25日以前の日曜日にすませて、早速お正月の準備ということになりがちですが、降誕節は12月25日から1月5日まで続きます。1月6日からは主がすべての人に現れてくださったことを祝う顕現節です。クリスマスに結び付けて考えられ易い学者たちが主イエスのもとにやって来たことはこの時に記念されます。顕現節のあとは、復活祭を中心にしたもう一つのサイクルに入ります。復活祭のまえ40日（日曜日を除いて）は四旬節と呼ばれ、もともと復活祭に洗礼を受ける人たちの準備の期間でした。主イエスの受難については、ことに受難週に覚えますが、受難週の集会をすべての人々のために開くことが難しいために、次第にこの時期の主日に受難の出来事を覚えるようになってきました。復活祭は最も早い時期から守られて来た祭日です。使徒言行録の時間設定に従って、復活祭のあと復活後の期節があ

使徒言行録1：3－11，2：1－4参照

って、40日目に昇天日、50日目に聖霊降臨の出来事が記念されます。このような祭日を中心にする時期には、主イエスの出来事を中心にして聖書の日課も選ばれています。聖霊降臨で人々の中で父、み子、聖霊の働きが覚えられ、三位一体の神さまを考える三位一体主日、その後に聖霊降臨後の期節となります。

典礼色とシンボル

こうした教会の期節には、それに応じた典礼色が定められています。聖壇の掛け布や牧師のストールの色がそれです。紫は慎みやざんげ、白は主の栄光や勝利、赤は殉教や聖霊の炎、緑は調和と成長を示しています。主イエスの受難と復活を示す十字架や世の光である主を表すろうそく、初めであり終わりであると言われた主を示すギリシャ文字の最初と終わりのアルファとオメガ、「イエス」のギリシャ表記からくるIHC（あるいはIHS)、「キリスト」のギリシャ文字の最初の二字X（キー）とP（ロー）の組み合わせ、「イエス・キリスト、神の、子、救い主」の頭文字の組み合わせと同じことになるギリシャ語のイクスス＝魚のシンボル等は、古くからよく用いられてきました。教会堂の聖壇は聖餐のための食卓ですが、時には初代教会で殉教者の墓を聖餐台にして礼拝を守ったということを伝えるものとして石の聖壇が作られることもあります。こうしたさまざまなシンボルは、それぞれの形で主イエスを信じる信仰を表しているのですから、その意味を考えて用いるようにしたいものです。

イエスはΙ η σ υ s
キリストは
Χ ρ ι σ τ ο s

＊教会にあるいろいろなシンボルや暦に関するものを見つけてみましょう。

(12) 教会生活

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。

（Ｉコリント 12:27,28）

聖霊はこのキリスト教会において私とすべての信仰者に、日ごとにすべての罪を豊かにゆるし、そして終わりの日に、私とすべての死者をよみがえらせ、わたしに、キリストを信じるすべての者とともに、永遠の生命を与えてくださいます。　（ルター・小教理問答書）

教会に連なる信仰

教会とは、主日の朝に礼拝にゆく所という感じとはたいへん違う考え方を、聖書にも、また教理問答にも見ることができます。私たちは必ずしも毎日教会に行っているわけでないのに、教会において日ごとに罪がゆるされると言われています。教会はキリストに連なるからだである信仰者全部を指すからです。私は、信じているが教会へは行かない、などというのは、言葉の矛盾です。直接、間接に教会を通して、私たちに聖霊の導きがあって、信仰に導かれます。そしてどこにいようとも、もし私たちがキリストに連なっているなら、かしらであるキリストのからだとしての教会に属していることになります。この教会が私たちの信仰の母体です。

交わりの中で

しかし、それだからこそ、具体的な教会の交わりの中での生活が必要です。自分の勝手な理解による信仰に陥らないように、私たちは公同の礼拝に参加し、互いにみことばを証しし合い、助け合ってゆきます。聖書の言葉を理解するためにも、礼拝の中の一つ一つのことに本当に合わせられてゆくにも、牧師や信仰の仲間た

ちの助けがあります。私たちは自分にとって都合のよいように聖書を解釈し、話を聞いてゆこうとしますから、一人合点するのでなく、ほかの人たちの言葉によって確かめあってゆくことが必要なのです。また何代にもわって信仰を保っていることが少なく、絶えず信仰の試練にされされているようなわが国においては、互いに信仰によって歩む生活について教え合い、助け合ってゆくように努めなくてはなりません。そのような意味でも、教会の交わりの中で信仰生活をもつことが大事です。

いろいろな集会

それぞれの教会では、主日の礼拝だけでなくて、さまざまな集まりがあります。そのような集会は、信仰を自分の生活の中により深く浸透させるためのよい機会です。もちろんほかの人の考えがいつでも正しいとは限らないし、自分の場合には当てはまらないこともあります。しかし、互いに謙遜に聞き合って、聖書の本当の意味を求めてゆくようにします。

目前の姿だけでなく

信仰生活は息の長いものです。永遠の生命に生きるいのちにあずかるまで、教会の生活は続きます。すでにこの世を去った信仰者も、ある意味では今も教会の交わりに連なっています。目には具体的に見えなくても、キリストとすべての信仰者たちが、私と共に悩んだり、喜んだりしてくれています。そのような広い、長い視野をもって、具体的な教会の交わりを考えてゆくようにします。それは自分の生涯においても当てはまりますし、家族と共に歩む信仰生活にはことに大切な視点です。

ゆるしと執り成し

Ⅰコリント8：11参照

教会はもともと、ゆるされた罪人の集まりでしかないのですから、実際には、問題の種になるような人がいたり、自分がそういう者であったりします。けれども、その兄弟のためにもキリストは死んでくださったことを考え、執り成し助けてゆくように努めなくてはなりません。場合によっては、主イエスの教えのように、兄弟としての忠告をしたり、教会が戒めても、聞かれないで、「異邦人か徴税人と同様に」（マタイ18:17）見なさなくてはならない場合もあります。しかしそれは、福音を改めて伝える対象となることであり、異邦人や徴税人がかえって信仰に近い場合もあったことを思わなくてはなりません。

互いに仕える

教会が実際に運営されてゆくためには、必要なたくさんの働きがあります。さまざまな働きをいつも注意していて、一生懸命奉仕することによって、自分の力で教会を支えているように自負しているような人がいるかもしれません。そのような働きは、たいへん素晴らしいことですが、しかし教会は個人的なものではなく、いつも不完全ではあっても多くの人が協力してゆくことが求められています。そうでないと、次の時期を担う人が出てこれないことにもなります。そしてみんなが、お客さまではなくて、たとえ地道なことでも教会を支えてゆく働きを見つけ、たずさわってゆかなくてはなりません。奉仕に加わることができるのも、恵みであり喜びであるからです。決められた仕事や責任を果たすだけでなくて、教会全体の働きを考え、必要な仕事を見つけてゆくようにしましょう。

＊私たちの教会がどういう働きをしているのか、またすることができるのかを考えましょう。

(13) 神によって与えられたいのち

あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。（マタイ 6:27）

われわれは神を畏れ、愛すべきです。それでわれわれは、隣人のからだをきずつけたり、苦しめたりしないで、むしろあらゆる困難の場合に、彼を助けはげますのです。（ルター・小教理問答書）

神が創り愛し給ういのち

事故で人が亡くなったりすると、何百万、何千万という補償金の額が話題になったりします。しかしどれほどのお金を積んでも、かけがえのないその人のいのちは取り戻せません。ところが、そういう私たちのためにみ子イエスのいのちが代価として支払われたと、聖書は告げています。罪と悪のとりこになっていた者が買い戻され、永遠のいのちにあずかる者とされるのです。お互いのいのちが失われてしまったら、元も子もないというだけでなく、それぞれのいのちが神さまによって造られ、愛されているからこそ、その人自身を尊重しなくてはなりません。それは自分のいのちについても同様です。

Ⅰコリント6：20参照

いのちの尊重

殺してはならないという戒めなどは、私たちはめったに犯すこともないようですが、深く考えると必ずしもそうでないのです。ただ消極的に人を傷つけたり、殺したりしないというだけでなく、いのちを尊重してゆかなければなりません。具体的に暴力をふるわなくても、言葉でも態度によってもほかの人を傷つけることができます。自分でそんなことはしないというだけでなく、隣人に危険や災害が起こらないよう

に、未然に防ぐよう努力しなくてはなりません。さらに進んで親切と愛とを示すことが求められます。それぞれに与えられたかけがえのない人生の意味と価値を見て、それを積極的に用いてゆかなくてはならないのです。

ひと時をも大切に

どんな人生であっても、私たちの生き方によって神の愛を証ししてゆくことができます。だから自分の健康にも注意を払ってゆくことが求められます。自分の人生は、自分の気ままに始末してよいものではないのです。いろいろな人からの愛の関わりがあり、ことにも神さまの愛が注がれています。決して安直に自分のいのちを見限ったりしてはなりません。無理に延命装置をする必要などはありませんが、神さまが召してくださるまでは、最後の瞬間までしっかり生きることが必要です。この世の生に執着するからではなく、むしろ永遠のいのちの約束をもっているからこそ、ひと時をも大切に生きるのです。

他者のいのち

もちろん自分のいのちだけでなく、ほかの人のいのちについても、それぞれが尊重されなくてはなりません。公害や貧しさなど、間接的に人命をそこなう問題にも気をつける必要があります。精神的に傷つけることも、相手にとってばかりでなく、傷つける人自身にも問題です。戦争や特別な自己防衛などの場合、相互のいのちがかかっていて、一面的には考えられないときもあります。少なくとも、そういう事態にならないですむように努めなくてはなりません。社会的に直接の役に立たないからといって、弱

マタイ5：21以下参照

いいのちや、人の世話にならなくては生きられないようないのちを軽視してはなりません。そのような人のためにも、主は死なれました。まだこの世に生まれていない胎児のいのちについても同様です。胎児が、どの時点からひとつのいのちとして考えられるかということは、医学や法律による一応の線は考えられることがあっても、それが確かな基準とは限りません。二つのいのちのどちらを生かすかというような問題に直面して、やむを得ない場合もあるでしょうが、母の胎内で、まだからだもできていない時から見守ってくださる神を信じる信仰は、安易に妊娠中絶に走るようにはさせないでしょう。さらに今日の医学や技術の進歩は、判断に困る問題も提供しますが、どんな場合でも、創り主であり、また愛し、ゆるしてくださる神のみ旨を中心にして考えたいものです。

ほかの生き物の生命

人のいのちはもちろん尊重されなくてはなりませんが、私たちの生活はいろいろな生き物のいのちの犠牲の上に成り立っています。それらのいのちもまた神のものにほかなりません。もちろんだからと言って、蚊やごきぶりなども大切にと言われても困ります。しかし、旧約聖書においても人が動物を自分たちのために用いることは許されていますが、そのいのちは人が勝手に左右するのでなく、神に返すことが求められました。血はいのちと考えられ、それを食べてはなりませんでした。新約の民は旧約聖書の戒めをその通り守る必要はありませんが、しかしそこに示されている精神のなかで、汲むべきものを受け継いでゆくことは必要です。

レビ17：10以下、申命12：23以下参照
＊「殺すな」の戒めが関わる問題の広がりと、何が自分たちでできるかを考えてみましょう。

(14) 男と女

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」（創世記 2:18）

われわれは、神を畏れ、愛すべきです。それでわれわれは、言葉においても、行ないにおいても、きよく正しく生き、また夫婦は互いに愛し、うやまいあうのです。（ルター・小教理問答書）

男と女に造られる

創世記2：18

人は男であることによって人間であるか、女であることによって人間であるかのいずれかです。それぞれ違った身体的構造と役割を持っています。しかし、それは互いに助け手として働くことができるためです。便宜上の手助けというのではなく、私たちのために語ってくれる独立した存在であり、私たちもそれに語ることができ、互いに助け合う交わりを造ります。自分の性的満足を満たすために異性があるというだけでなく、私たちはこの人間社会が男と女とからできており、それが神のみ旨として造られていることの意味を考えなくてはなりません。

役割の分担

しかし、男女の役割は、創造の時から定められているという面だけでなく、歴史的、社会的に変化していく側面があります。現在の世界では、男性の方が社会的な役割の多くの部分を担っているようですが、いつでも、どこででも、そうであったとはかぎりませんし、そうでなければならないというわけでもありません。男も女も共に社会的な役割を担うようになってゆく中で、互いに人格的な存在として、また互いに助け手としてあるということを、どのように具体化していくべきか、いつも現状に即して追求

してゆくことが必要です。

Ⅰコリント11：5
Ⅰコリント14：34参照

パウロは、祈りをしたり預言したりする時、女は頭にかぶりものをすべきだとか、教会では婦人たちは黙っていなさいとか、言っていますが、それは多分に当時の文化的背景によっていると言えます。パウロの基本的な考えは、むしろ「主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません」（Ⅰコリント11:11）、また「そこではもはや・・・男も女もありません」（ガラテヤ4:28）というような言葉に現されているのです。

聖霊の宮として

男性であったり、女性であったりするのは、創造における神のみ心です。性的な欲望をほしいままにするというのでも、ほかの性をうらやましがるということでもなくて、それぞれ自分の特性を生かして助け合うようにしなくてなりません。主は、情欲を抱いて異性を見る者は、心のうちですでに姦淫を犯した者だとさえ言われました。罪の中にある人間にとって、性的な欲望は最も身近かな、罪の宿りやすい場所でもあります。しかも、性的な生活での間違いは、多く自分の身に罪を招くだけでなく、相手をも傷つけることになります。それだけに、いつも清い交わりをもつように心掛けることが必要です。パウロは自分のからだは「聖霊の宿ってくださる神殿」（Ⅰコリント6:19）なのだから、それを汚すことのないようにと勧め、キリストに属する者は、自分の「肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまった」（ガラテヤ5:24）のだと言っています。

マタイ5：28参照

召しに従う清さ

しかし情欲が全く否定され、感動のない中性的な存在になってしまうことが理想なのではありません。神によって許された関係以外で、自制することを忘れてはならないというのです。初代教会にも、不品行な人たちがいて、使徒たちの心を悩ましていますし、逆に主イエスは徴税人や娼婦たちの方がほかの人たちより先に神の国に入るだろうとさえ言われました。罪のゆるしの福音は、不品行な人や娼婦にも、信仰によって与えられます。しかしそれだからと言って、そのような生活をそのまま続けてよいというのではありません。私たちは、与えられた立場で、神の召しに従って清く生きるように努めなくてはならないのです。性的な欲望は、確かに深く私たちの中に潜んでいますが、それに支配されるのではなくて、むしろ神のみ前に立つ人間としてどのように生きるかということの中で、性的な問題も考えてゆかねばなりません。

マタイ21：31参照

神の意志を基礎に

旧約聖書の中には、間違った性的行為に対する厳しい戒めがあります。それは、性的な問題が古くからあって、人間が長い歴史を通じて悩んで来たことを示しているとも言えます。旧約の時代のように、間違った行為を犯したと考えられる者は、石打ちの刑にして自分たちの中から除いてしまうというのではなくて、現在はいやしと正しい生き方へ導かれて行くことが期待されています。それぞれの人のあり方は尊重しなくてはなりませんが、世の中の人々がこうしているからと言って、間違ったことを見習ってはなりません。いつも神さまの意思を基礎に考えて行ったことを学んでゆくことが必要です。

レビ記18章、20章参照

＊私たちの周囲にある誤った性的な問題や差別に対して、どのように考えていくべきでしょうか。

(15) 結　婚

「創造者は初めから人を男と女とにお造りになった。」「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」　（マタイ 19:4～6）

神はこの結婚生活を、戒めをとおして保証し保護なさることによって、いかばかり尊重讃美しておられるか。・・・結婚生活というものは、けっして遊びや冗談ではなく、まことにすばらしくも厳粛な神聖事である。　（ルター・大教理問答書）

神の定めの結婚

結婚によって、ひとりの男とひとりの女とが結ばれて、一つの家庭を造ります。多くの動物のように繁殖期にだけ相手を求めるのでも、ひなが独り立ちできるまで世話をするというだけでもありません。互いに人間として恒常的な愛の交わりを保ち、子どももまたその中で人格の形成をします。人間が結婚し家庭を形成するのは、単に性的な満足を満たすためでも、子孫を造るために必要な手段というだけでもありません。結婚式の仕方や家庭の形態は、時と所によって違ってきますが、その基本的な意味は神さまによって定められた人間の秩序です。

召しに応じて

誰でもどういう形においてか、神の定めである結婚の交わりの中で生を受け、また育てられます。しかし自分が結婚するかどうかは、必ずしも定まっていることではありません。主イエスも「結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる」（マタイ19:12）と言われました。それぞれの人に、神の召

しがあるということができるでしょう。さらに結婚するにしても、いったいいつ、だれと結婚するかは、それぞれに考えてゆかなくてはならない特別のことがらです。また決して成り行きが、そのまま私に対する神の召しと考えることもできません。

神の定めの中での愛

自分がクリスチャンではなくても、「結婚式はキリスト教でしたい」と望む人もいます。わが国におけるいろいろな様式の結婚式も、多分にキリスト教の影響を受けています。愛を強調する聖書の教えが、結婚にうまく合っているように感じられるからでしょう。しかし、神の愛はどんなに価値のない者にも、惜しみなく自らを与える愛です。特定の相手のみを選ぶ結婚の前提となる愛とは違います。特定の相手を選ぶためには、そこですでに働いている原則があります。神さまが人間の結婚を定めてくださったことの中に含まれている結婚の意義や目的に合わせて、考えてゆかなくてはなりません。その中で愛がより深く考えられてゆくのです。

社会的な関わり

豪華な披露宴をしても、いつまで続くのかと噂されるような結婚もあります。しかし、神が合わせられた結婚は、たとえ式を教会で挙げていなくても、生涯の結びつきです。しかも二人は、互いに助け手として、人格的な交わりをもってゆきます。当事者である二人が中心であることはもちろんですが、しかし同時にそれぞれが社会的な関係を背負っていますし、子どもの誕生、教育を通してもその関係は広がってゆきます。新しい家庭は、また社会的な単位として

位置づけられます。社会的な関わりの中での務めも引き受けてゆかなくてはなりません。

具体的な考慮

配偶者を定めるには、それぞれが成長してきた環境や働き、性格などをも、十分考慮することが必要です。一番安心してくつろぐ家庭生活では、ちょっとした相違でもひどく問題に感じられることがあるからです。しかし新しい家庭の形成は、ふたりの愛と努力によってなされます。ただ自分の理想だけを相手に求めることはできません。夫婦の生活や子どもを産み育てることに耐えられる健康や情緒的な成熟も必要になります。結婚は性的な欲望が無秩序に働こうとすることに対する防壁と考えられたこともあります。そのように消極的にだけ考えられてはなりませんが、具体的にはそれも大切な側面です。それぞれ違う側面をもっていても、夫婦は互いに一体ということの意味を考えてゆくことが必要です。社会での働きや家事、育児などの仕事も、片方だけの責任というわけにはゆきません。愛において、助け合い、許し合いつつ、互いにそれぞれが成長してゆくのです。

そのような夫婦の生活の一番の基礎として、共に主を仰いでゆく信仰があるならば、たいへん素晴らしいことです。もちろん相手に信仰がない場合であっても、造り主である神さまのもとで、結婚も結婚生活も成立します。ただ信仰と結婚生活とは別のこととして割り切ってしまうのでなく、相手の信仰への理解をえ、さらには共に信じる方を見上げて行けるように努めたいものです。

＊結婚式文に見られる結婚の課題を考えましょう。

(16) 信仰のライフサイクル

エルサレムの広場には　再び、老爺、老婆が座すようになる　それぞれ、長寿のゆえに杖を手にして。都の広場はわらべとおとめに溢れ、彼らは広場で笑いさざめく。　（ゼカリヤ 8:4-5）

宝は十分にありながら、人々のとらえ方、確保の仕方が十分ではない。それゆえ、キリスト者はだれでも、洗礼に関しては生涯にわたって勉強し、習熟すべきことを十分に持っているわけである。

（ルター・大教理問答書、洗礼）

ライフサイクルと信仰

信仰は一時的なものであってはなりません。むしろ神と共にする生涯の歩みです。ところがどうかすると私たちは、ある時になんとか差し当たっての悩みを乗り越えると、その時の信仰理解に留まってしまおうとします。そして時間がたつと、いつのまにか信仰を卒業し、違った考えに陥ってしまうこともあります。しかし、神と共に歩むことは、その時々の課題にいつも新しい思いで取り組ませるはずです。そして人生のあらゆる時期に、どんなことに対しても、信仰は導きと力を与えます。宗教改革者ルターは、聖書の博士であり説教者でしたが、毎日そして時間がありさえすれば、子どもと同じように主の祈り、十戒、使徒信条、詩編などを一語一語読み、唱え、学んでいると言いました。ある人は逆に、教理問答で教えられるような信仰を、小さい子どもに与えられたお城にたとえました。今は小さな子ども部屋があれば十分なのだけれども、自分が成長してゆき、また事に出会うにつれ、それがどんなに思慮深く造られていたのかが分かるようになるというのです。私たちは、繰り返し同じような課題に出会い、そ

れに取り組みながら、より深い信仰の理解を与えられてゆきます。神さまが備えてくださった恵みが行き届いていたことを感じさせられるようになります。自分の人生の中でもその時期にふさわしい聖書の理解をもつことができるように努めてゆかなくてはなりません。

神の都の姿に

ひとりの人について見ると、生涯の歩みの中で絶えず聖書を学んでゆくのですが、聖書に聞き、教会に集う人々をみれば、老いも若きも共々に礼拝を守っている姿に、預言者が描いた神の都の理想像が思われます。若い人が多かったり、高齢の人がたくさんいたりするのは、その教会の現在のあり方の特徴を示しており、楽しく素晴らしいことですが、同時にいつでもあらゆる年代の人々が共にいることができるように努めてゆくことも必要です。乳飲み子までも主イエスのもとに連れてきた人々を、弟子たちは叱りましたが、イエスは彼らを呼び寄せ、受け入れてくださいました。幼い子どもも、青少年も、壮年層あるいは高齢の人でも、また男も女も、一緒に神さまの前にいることができることこそ望ましいことです。そして十年もたてば、それぞれの立場はまたずいぶん変化してしまうのです。

互いの理解と努め

しかし、違った年齢層の人々が一緒にいるためには、お互い学ぶべきことばかりでなく、忍耐しなくてはならない面や、具体的に努力しなくてはならないこともあります。家族が困難にあっている時や子どもを育てているとき、あるいは仕事の関係などによって、人生のある時期

には、教会に集まることもままならない場合もあるでしょう。しかし、イエス・キリストをかしらとする交わりは、具体的に顔を合わせることを越えて、生きたからだの部分、部分として連らなっています。そのことが少しでも具体的に感じられるような交わりを造ってゆくことが肝心です。若い時にはいつも教会に入りびたりで、人々から貴重な働き手として大事にされたけれど、病気になったり、歳をとったり、困難に直面したりして、一番信仰の励ましの必要な時には、訪ねてくれる人もない、といった嘆きなど、決して聞かれないようにしなくてはなりません。それには本人も、そして教会のほかの人々も、年齢を重ねるにつれて、また状況の変化するにつれて生じてくる課題を理解し、長い目でその克服を考えてゆくようにしなくてはならないのです。

変化に合わせて

長崎のキリシタンたちは、二百年もの間、指導者を持たず、公にははばかっての生活であったのに、きちんと信仰を伝えました。お互いに支えあう交わりをもっていたからこそ、そのようなことができたのでしょう。現在のさまざまなあり方においても、また人生のさまざまな時期にも、互いに理解し助け合うことが求められます。教会は、幼い者も年老いた者も、元気な人も弱い者も含めた交わりです。しかし今の状態はいつまでも続きません。人が毎年歳を重ねてゆくのは当然のことだからです。時の移り変わりに応じて、いつでも互いに執り成しあい、補い合う交わりを作り、またそのために共に考えてゆくように努めたいものです。

＊私たちの教会の中で、世代の違う人々の交わりをもつために、どういう努力が必要でしょうか。

⑰ 死と葬儀

イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいます。（Ⅰテサロニケ 4:14）

死の道も神へと向かい、そこへ私たちを導いてゆく。ここに狭い門、いのちにいたる細い道が始まる。この道をだれでも勇躍前進しなければならない。（ルター・死への準備について）

キリストにおいて見る自分の死

この世に生きているものは、みな必ず死んで行きます。そのことが分かってはいても、自分自身のこととなると、生の限界としての死を考えることは大きな恐れとなり、不安をもたらします。死は歳をとってから迎えることではなくて、いつも私たちとただ一歩のところにあります。私たちが自分の人生をどう生きるかを決めるものでもあります。考えたり、感じたりしている当の自分自身の存在がこの世からなくなってしまうということは、とてもあってはならないことのように思われます。自分自身の力で、自分自身の死を考え、それを克服することはできません。むしろこのような私に、主の目が注がれ、このような私に代わって主イエスの死と復活があり、イエスと共に永遠のいのちに生きることが許されていることにこそ、注目していなくてはなりません。パウロは「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです」（コロサイ3:3）と言っているのです。

サムエル上19：3参照

新しいいのちの望み

私たちは、洗礼によって、キリストの死と復活にあずかる者とされます。洗礼によって主に

ローマ6：4, 洗礼の項参照

ある新しいいのちを生きはじめます。私たちの肉体は小さい時から成長し、老化し、やがて消え失せても、このいのちは神のみ手の中にあります。そして新しい創造の力の中で、復活のからだを与えられます。聖書的な考えは、私たちの肉体が滅んでも霊魂はどこかに生きているとは言いません。その意味では、むしろ現実的に見ています。しかし神さまとの関係は残っています。主が「ラザロよ、出てきなさい」（ヨハネ11:43）と叫ばれたとき、死んだラザロが墓から出てきたように、私たちはたとえ肉体がどうなっていたとしても、み声に応じて、新しい創造として呼び出され、主のもとでのいのちを生きるのです。

生きる限り

家族の一員が亡くなるまでは、医者の力に頼ってあれこれと心配していて、亡くなってしまってはじめて、さてうちの宗教は何だったのかと考えるようなことが、えてして起こりがちです。しかし、キリスト者は生きている間に罪のゆるしを受け、死に際しても神の恵みのみ手に自分を委ねることを大切に考えてきました。そこで緊急の場合には、自分の牧師を呼んでもらうように心掛けてきました。死んだ途端に仏となったり、神の子となったりするのではないのですから、生きている間に、永遠のいのちにあずかる約束を得てゆくことが大切です。小さいことにも自分の死への備えを考える一方、たとえだれが望みがないと言っても、神がそのいのちを取りたもうまではこの世に生きる使命と恵みを信じて、希望を失わないようにします。

信仰にふさわしい葬儀

信仰者の葬儀は、その人の信仰にふさわしくキリスト教の葬儀がなされることが自然です。しかし葬式が人を天国に導くわけではありません。もしキリスト教によらないで、家族の宗教によって葬式がなされるようなことがあったとしても、その人の救いには関係ありません。しかし、人生の終わりを告げる葬儀は、本人の信仰にふさわしいものでありたいものです。家族の中にキリスト者がいないような場合には、はっきり自分の意思を表明しておくことが必要となります。またキリスト教の葬儀は、亡くなった人に何かを加えるのではなく、残された人に慰めを与えるのが本旨です。信仰において亡くなった人を神さまのみ手に委ね、その生涯を通して人々に与えられた神さまの恵みに感謝し、残った者もそれぞれ自分の人生について考え、生死をつかさどられる主に対する信頼を新たにすることが、葬儀で考えることです。本人が明らかな信仰を表明しなかった場合でも、残された遺族の希望によって、キリスト教の葬儀が行われることもできます。弔辞も、亡くなった人に対してでなく、遺族への慰めの言葉として語られます。外面的にりっぱな式をすることよりも、神のことばへの信頼が強調されなくてはなりません。その意味で葬式もまたひとつの礼拝で、神さまが中心であるべきです。亡くなってから初めて牧師に連絡するのではなく、病床にある時から、信仰による励ましを受けることが必要です。しかし、もし亡くなられた時には、すぐ牧師に連絡して、事後のことを打合せをします。葬儀のあとの埋葬や記念会についても、その精神は葬儀の場合と同様です。

＊教会の葬儀式文を見ることができたらそれによって葬儀の意味を考えてみましょう。

⒅ 墓と死者の記念

キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。（Ⅰコリント15:20-21）

死者については、聖書は何も告げていないので、自由な黙想をもって次のような、もしくは類似の祈りをすることは罪ではないと私は考える。すなわち「愛する神よ、もしこの魂が憐れみを受けることのできる状態にあるのでしたら、どうかそれに恵みを与えてください」と。

（ルター・キリストの聖餐について、信仰告白）

神のみ手の中に

死んだ人がどうなっているのか、またそれに対してどうしなければならないのか、というようなことは、伝統的なわが国の宗教感情では一番問題になることです。しかし、この世を去った人が、この世に生きている者と同じような時間や空間の制約を受けるとも思われないので、私たちが地上で経験しているような形で、それを説明することは難しいと言わなくてはなりません。聖書は多くの箇所で、死者は眠っているように言い表していますが、また主イエスは十字架の上で死後直ちに楽園にいるようにも言っておられます。その状態についてはくわしくは分かりませんが、神のみ手のうちにあり、やがて復活し、裁かれることは確かです。主イエスと合わせられた信仰者は、主と共に復活して生きることが約束されています。

Ⅰコリント15：6以下

Ⅰテサロニケ4：13以下参照

ルカ24：43

葬る墓の問題

しかし、復活の時とされている終わりの日に至るまでの間はどうなのでしょうか。死んだ人たちは、その墓にいるのでしょうか。イスラエルの人たちは同じ墓の中で先祖と一緒に眠ると

考えました。この世において神さまによって与えられ、聖霊の宮であったからだや、愛する者の遺骨を通して、その人を偲ぶことは、自然の感情だと言えます。しかし、主イエスの墓は、復活によってからになりました。教会の伝統の中では、多くの場合遺体をそのまま葬りましたが、それはラザロの復活のときのように、墓から呼び出されることを考えていたのでしょう。しかし、創造の力をもっておられる神さまが呼び出されるのに、古いこの世でのからだがどうなっていても、それはいっこうにかまわない筈です。またそうであれば、墓にも必ずしもこだわらなくてもよいと言えます。まして、お墓の相によって子孫に祟りが起ったりするようなことは、聖書的な信仰の中では考えられません。信仰が明らかになるような形で、簡素な墓石があればそれで十分です。もし都合で、ほかの宗教に関係する墓地であったとしても、それによってその人の救いに支障をきたすわけではありません。ルターは、「人間の魂が最後の審判の日まで止まり休む場所は神のことば」であると言っています。特定の場所に死者がいるというよりも、神さまの約束に委ねているのです。

ヨハネ11章参照

信仰を持たなかった人の場合

しかし、信仰をもたずに亡くなった人の死後はどうなるのでしょうか。神さまを信じないで死んだ人たちには、滅びが宣言されると言われます。しかし、愛である神さまが審判者です。私たちがただ外面的なことで判断し、神さまの審判を横取りして判定をくだすわけにはゆきません。生きている間にみことばを信じるようになることが大切なことは勿論ですが、私たちが

キリストを知らないで死んで行った人たちに対してすることができるのは、ひたすら執り成しをすること以外ではありません。聖書的な考えの本流とは言えませんが、信仰者がほかの家族をきよめるというような考えや、死んだ者にも福音が告げらされたというような聖書の言葉もあります。それが当てはまることかどうか分からないとしても、亡くなった人を愛の神のみ手にゆだね、私たちが執り成し祈ることはできます。そのためにも、私たち自身がしっかりした信仰をもつようにならなくてはなりません。

Ⅰコリント7：14

Ⅰペトロ4：6参照

亡くなった人の記念

墓参や記念会についても、定まったことはありませんし、それを守らないと不都合が起こるわけでもありません。しかし、墓前の礼拝や、適切な時に、亡くなった人に与えられた神さまの恵みと、その人を通して私たちに与えられた神さまの恵みを覚えて記念し、神に感謝することはふさわしいことです。アウグスティヌスの母モニカは、主の聖壇の前で私を覚えなさいと言い残したということです。黙示録の中でヨハネは、地上の礼拝が先に召された者を含む天上における礼拝に呼応してなされているように述べています。「聖徒の交わり」である教会は、キリストにあって、主につらなるすべての人の交わりでもあります。そのような教会の礼拝の中で亡くなった人のことを覚えるのは、最もふさわしいことです。もし亡くなった人が神さまへの信仰を表明できなかったとしても、死者の記念は残っている人への慰めと励ましが中心なのですから、事情によっては、キリスト教的に記念しても差し支えありません。

＊納骨や記念の祈りの式文をみることができれば、それによってそれぞれの意味を考えましょう。

(19) ほかの宗教

現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものがいても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。（Ｉコリント8:5-6）

ただ心の信頼と信仰のみが神と偶像の両者をつくるのである。信仰と信頼とが正しくあれば、あなたの神もまた正しいのである。

（ルター・大教理問答書）

宗教とキリスト教

キリスト教も宗教の一つとしての側面を持っています。教会も宗教法人になったり、法的な取り扱いを受けたりします。しかし、そこで信じられていることが、ほかの宗教と並ぶ教えの一つとは考えられません。法的な意味では、信教の自由はすべての信仰や宗教団体に自由を保証するものとして、守られなくてはなりませんが、信仰の内容は、当然それぞれの主張があります。聖書の信仰の中で、ほかの神々の位置はありません。しかしどこででも、人が何かの宗教を信じ、自分の人生の拠り所を求めていることは、もともと人が神さまとの関係の中に造られていることを示していると言えるでしょう。

どういう間違いが起こるのか

人が信仰的な求めをもっているということは人間の基本的な必要の反映ではありますが、それが諸宗教の形を取るとき、固定化した、間違った方向に導かれる恐れがあります。どのような宗教でも、ある程度の安心や希望を与えてくれるでしょうが、聖書の信仰から見て、どういうことが間違いになるのでしょうか。

第一に、創造者である神さまでなくて、被造

物を礼拝することは、神を神とせず、自分の欲を基礎にすることになります。第二に、ほんとうの神さまでないものを、夢中になって確かなもののように思い込もうとすると、その信仰は狭い、狂信的なものになりかねません。本来の信仰は、自分自身をも、またこの世をも、明らかに見ることができるようにするはずです。第三に、神さまの造ってくださったこの世に対して、いたずらに否定的になったり、敵意を持ったり、逆にその中で直接的なご利益(りやく)だけを求めるようになると、その信仰の性格が問題です。いろいろな教えの中には、正しいことも含まれているでしょうし、りっぱな人もその中にいることは確かです。けれども、「仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい、ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます」(ヨシュア24:15)とヨシュアが言ったように、自分にとっての救いと信頼の拠り所をはっきりさせなくてはなりません。

神を中心にして

日本人は一面たいへん宗教的で、実際の人口よりもはるかに多い宗教人口をもち、いろいろな宗教を同居させようとします。しかし、自分がほんとうにそこに立って生きるという献身的な信仰になることはためらいます。確かにそれが狂信的、一面的な信仰の態度になることを避ける働きをしていると言えるかもしれません。しかし、自分を中心とするのでなく、神さまを中心にして生きることが聖書的な信仰です。献身の一面がないところでは、自分に仕えてくれる神を求めるだけになってしまいます。

転換されるもの

キリスト教の信仰にとって、一般的な宗教や宗教心が、信仰に導く手掛かりになることがあります。しかし同時に、これまでの自分の宗教心そのものがを考え直すようになるはずです。自分がはっきり分からずにいた時にも、神さまが導いていてくださったことを感謝しても、それまで拠り所にしていた教えが真理であったということには、必ずしもなりません。もちろん同じ高嶺(ね)の月を見るといって、どんな宗教を信じてもよいというのでもないのです。神を知ろうとすることから、むしろ神に知られたという自覚に、私たちが考えることから、神さまが示してくださることへ、信仰は私たちを転換させます。ほかの宗教をけなしたり、むやみに批判する必要はありませんが、その違いははっきり捕らえていなくてはなりません。

ほかの宗教の儀礼

実際生活の中で、家の宗教の儀礼や関係ある人々の宗教儀式などに、参加を求められる場合もあります。旧約聖書に現れるナアマンは、神の人エリシャのもとで病を癒され、異邦人でしたがまことの神を知るようになりました。そして主以外の神々に献げ物をしたり、礼拝することはしないと誓います。しかし、自分の主君が自ら信じる神殿に行くとき、その礼拝の介添えをしなくてはならないことだけは、許してくださるようにと願って許されました。同じような問題に私たちも出会うことになるのかもしれません。ことに葬儀などの場合は、慰められなくてはならない人々がいるのですから、そのことを主体に考えて行動したいものです。

列王下5：17以下参照

＊自分にとってのほかの宗教と、他の人にとってそれが意味する場合の相違は何でしょうか。またそれだからある使命を考えましょう。

(20) 迷　信

しかし、今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか。

（ガラテヤ 4:9）

神以外の、あらぬところに気をとられ、被造物や聖者、もしくは悪魔のもとに助けや慰めを求めて、神を受けいれず、あるいは人を助けようとなさる神の恩恵さえも期待せず、およそ自分の身に起こるしあわせはすべて神からくるということも信じない、そういう心にこそ特に偶像崇拝は存する。（ルター・大教理問答書）

気になる迷信

人々の考えがたいへん科学的になって、事の次第を理性的に考えることが一般になされるのに、迷信的な習慣や考えは、依然として力をもっています。家の方角や日の吉凶、星占い、姓名判断などが人の不安に拍車をかけたり、これさえ守っていれば万事よくなると、はかない希望をかけたりします。血液型やDNAといういかにも科学的な知識で、その人の運命が決まってしまっているかのように考えている場合もあります。ふだんは馬鹿にしていても、いのちの危機にさらされたり、何もかもうまくゆかないような状態に陥ると、いろいろな事を気にやんだりします。そして呪術（じゅじゅつ）的な行為で事態を変えることができるかのように思ったりするのです。

人が神を制御する

もともと呪術は、人間が呪文（じゅもん）や何かの行為をすることによって、霊的な力を制御してゆくことだと言います。すべての事物の背後に、生きて働かれる神さまを見る信仰とは全く別のことだと言えます。また神さまは、正しいみ旨で、

愛と恵みをもって人々を助けようとしておられます。その神さまを、自分に都合のよいように利用してゆけるかのように考えるなら、いかにも見当違いということになります。旧約聖書には、「占い師、卜者、易者、呪術師、呪文を唱える者、口寄せ、霊媒、死者に伺いを立てる者」（申命18:10, 11）などが禁じられています。

キリスト教的迷信？

しかし、キリスト教の中にも、迷信やまじないがあるように考える人もいます。例えば13日の金曜日であったり、十字を切るとかいう類のことです。確かにいろいろなことが迷信的に理解されたり、用いられたりすることもないわけではありません。しかし、金曜日とか十三の数がどうして忌まれるのでしょうか。主が十字架にかかられた日は金曜日でしたが、教会の中では〈Good Friday〉（よい金曜日）とさえ呼ばれています。不幸な日ではなくて救いの日です。主イエスと十二人の弟子たちが集まった最後の晩餐には、なるほど十三人の人が食卓についたでしょう。しかし、同じように、それを不幸や災難と考えるのは、本来の救いのメッセージを聞いていなかったのではないかということになります。十字を切るのも、もともと主の十字架が自分のためであったことを覚えるためでした。神の愛の犠牲の行為であり、救いの中心である十字架を、ドラキュラ排撃用のニンニクと同列にしてはなりません。

神に覚えられる名

「名は体を表す」と言って、名前はその人の本質的な性格を示すものと言われることがあります。むしろ名をよばれることで、自分をそれに

ふさわしい者にしてゆこうとする力が働いたのでしょう。人生の大きな転機に、神さまを信じる信仰にふさわしい新しい名に変えられたという場合も、聖書には出てきます。しかし、そうした名前への関心は、姓名判断の意味とは全く違います。神さまは、私たちの名を覚え、ひとりひとりに呼びかけてくださいます。信仰を表明するような名前がつけられることは素晴らしいことですが、それ以上に、名前に吉凶を考えたりすることはありません。

創世記32：29など

イザヤ43：1参照

神のみ心を信じて

「地とそこに満ちているものは、主のもの」（Ⅰコリント10:26）です。私たちに与えられている日も時も、みな神のみ手にあります。物や事の背後に、目に見えること以上のものを認めるのは正しいことです。しかし、造り主であり救いの主である神さまを見るのでなく、悪霊を考えてはなりません。それはいつの間にか、悪霊のとりこになってしまうことになります。具体的な出来事を通して、神さまの戒めや注意を感じたりするのは自然なことですが、いちいちこれはあの出来事の罰だなどと考えるのは、当を得たことではありません。出会った出来事を自分への「おどし」として受け取るのでなく、むしろ神さまの愛に信頼して、いつも積極的に事柄を考え、神さまに向かって踏みだして行く契機としてゆきましょう。表面的なことを気に病んだりしないで、父なる神のみ心は「喜んで神の国をくださる」（ルカ12:32）ことだと信頼して進んでゆくのです。それによって、基本的な神さまとの関係をもう一度いきいきと取り戻すことをこそ、目指してゆくべきです。

＊自分が気になる迷信的なことがあればそれにどう対処したらよいかを考えてみましょう。

(21) キリスト教の教派とエキュメニカルな運動

キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。　（Ⅰコリント1:13）

キリスト教会の真の一致のためには、福音がそこで純粋な理解に従って一致して説教され、聖礼典が神のみことばに従って与えられるということで十分である。　（アウグスブルク信仰告白第7条）

豊かさとしての多様性

「キリスト教会」と一口に言っても、そこにはいろいろな特徴をもった教派があります。教会が世界の各地に広まって行ったとき、その土地の人々の考えの特徴が反映したり、時代に応じて必要な強調がなされたりしたのが、そのまま固定化して受け継がれて教派になったりしたわけです。教派として組織的には別であっても、もし基本的な信仰が一つであるなら、お互いにキリストに連なる一致を見ることができます。それぞれの特徴は、一つの木の違った枝ぶりとして、教会の豊かさを表すと考えて差し支えありません。そしてきっとその一致はいろいろな程度に具体化してゆくでしょう。しかし、自分たちだけが正しいとし、ほかの教会にキリスト教の真理があることを認めず、偏った主張をしたり、基本的な信仰告白からはずれているような場合もなくはないのです。その中には、キリスト教という名前を用い、また聖書を使っていても、もはやキリスト教とは言えないような場合もあるのですから、注意しなくてはなりません。

キリスト教会の基本

聖書が基と言いながら、ほかの物をそれと並んで、あるいはそれよりも重視していないか。

イエス・キリストを神の子、救い主として受け入れているか。父、み子、聖霊の三位一体の神を信じているか。この三つのことが、広くキリスト教という場合の基本的な課題です。また自分たちの仲間だけが救われる民であると主張して、この世から離れて生きようとしたり、神が創造されたこの世の生活に参与することを避けるのも、聖書の信仰的な態度と異なります。歴史的な信仰告白である使徒信条やニケヤ信条を告白しなかったり、聖書から取られてはいるけれども特別な主張が、偏ってなされたりする場合もあります。しかし基本的な信仰が一致しているなら、具体的な問題に対する意見や、信仰的な習慣、教会の組織の仕方などが違っていても、相互の理解と交わりを深めてゆくことができるはずです。そのように、お互いの理解を深め、できることは協力し、実際的な交わりをなし、一致を確かめてゆこうとする運動をエキュメニカル（世界教会）運動と呼んでいます。

ルーテル教会の立場

ルーテル教会は、ルターによる宗教改革の主張を受け継いできた教会です。聖書を基とし、宗教改革時代の信仰告白を自分たちの福音理解の旗印としてかかげています。それはキリストにより、信仰を通して救われることを基本的な主張としています。実際面では、福音信仰に反しない限り、教会の伝統的な習慣も生かして用いようとしてきました。礼拝様式などはその典型的な表れと言えるでしょう。しかし、伝統的なものも、いつも新しい時代と場所に適合してゆかなくてはなりません。またそういう礼拝の様式や教会の習慣、その組織の仕方などを、教

会の一致の条件とは考えていません。ルーテル教会ははっきりした主張を持ってきましたが、同時にエキュメニカルな運動の重要な担い手として働いてきました。ルーテル教会自体も、ドイツ、北欧、アメリカをはじめ全世界に広がっていて、信仰はひとつでも、それぞれ多少違う特徴をもっています。そして世界的に見ると、プロテスタント教会の中で最も大きなグループでもあります。

具体的な課題

キリスト教会に属していると分かると、一層しつように、自分たちの主張を押しつけようとしたり、専ら世の終わりが来ることを強調しておどしたりする人たちもあります。熱心に伝道するグループの中には、聖書以外のものを土台にしていたり、キリスト教の基本的な信仰からはずれていたりするものもあるので、注意しなくてはなりません。そしてそこに含まれる問題を正しくわきまえ、その熱心さに負けず、自分の信仰の立場を言い表せるようにしておくことが必要です。

エキュメニカルな働きの機構として、日本キリスト教協議会（NCC）や世界教会協議会（WCC）などがあります。エキュメニカルな運動そのものに反対しなくても、その運動の仕方に賛成しないグループもあります。このような協議会に属さないけれども、実際面で協力しているグループもあります。形式的にだけ判断するのではなく、実際に則して相互の理解と協力の輪が広がることを願います。またそういう姿勢をもっているかどうかが、そのグループの信仰理解がどういうものかを示すことにもなります。

＊ルーテル教会以外の教会について具体的に知っていたら、その特徴について考えてみましょう。

(22) ルターの宗教改革

人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。

（ガラテヤ 2:16）

われわれが恵み深い神をもっていることを誇るのなら、すべてはよい。さらに言えば、もしよい行ないが続いてこないなら、その信仰は偽りであり、正しいものではない。

（ルター・シュマルカルデン条項3-13）

16世紀の改革運動

ルーテル教会は、16世紀ドイツの宗教改革者マルティン・ルターの信仰の伝統を継ぐ教会です。アウグスティヌス会の修道士であり、ウィッテンベルクの神学教授であったルター（1483～1546）は免償符の効力についての提題（1517年10月31日）を直接の契機として、当時の教会の改革を図りました。ルター以前にも、それまでの教会の間違った習慣を批判した人たちがいましたが、彼は表面的な行き過ぎだけでなく、基本的な考え方の間違いを正そうとしました。同じころスイスではツウィングリやカルヴァンらによる改革の働きがありました。カトリック教会の中でも、ロヨラやザビエルの改革運動がなされました。しかしいろいろな経過を経て、ローマ・カトリック教会から独立した主なグループは、ルターの影響のもとにあったルーテル教会と、カルヴァンの影響を受けた改革派の教会、そしてイギリスの国教会でした。歴史の経過と共に、さらにそれが分かれた部分があります。宗教改革の流れをくむ教会は、一般にプロテスタント教会と呼ばれています。

改革の基本精神

ルターの改革は、教会の働きを時代の流れに合わせたというのではなく、本来の聖書の信仰に帰ろうとしたのです。当時の思潮に合わせて主観的な信仰を強調したとか、教会の近代化をはかったというようにだけ考えることはできません。その主張の第一は、キリストを信じる信仰によってのみ救われるということです。信仰はただ自分の考えや信念ではなくて、相手のあるものです。私たちの罪をあがなってくださったイエス・キリストへの信頼が基です。キリストにおける神の愛と恵みが私たちを救います。第二には、その信仰の具体的な拠り所が聖書のみであることを主張しました。キリストを証しする聖書を基として考えるべきであって、それとは別に人間の考えや伝統的な習慣を基礎にしてはならないということです。もちろん聖書も歴史的な文書としては、いろいろに解釈される面がありますが、信仰の書としてはイエス・キリストの救いのみわざを伝えるものにほかなりません。第三に、このような信仰は、主イエスの恵みによってのみ与えられます。人の努力や修行、研究の結果として得られるわけではありません。神さまは、教会の交わりの中で、みことばの説教や聖礼典、信仰の証しなどをとおして働かれます。教会や教職はそれに仕えてゆくのであって、自分たちで恵みを左右するのではありません。すべての信仰者が、神の前の祭司として、ほかの人々のために執りなしてゆかなくてはなりません。それが全信徒が祭司であるという言い方で示されました。それは、だれでも神さまと直接取り引きできるということではありません。こうした信仰の基本から、さまざ

まな具体的な改革がなされました。

具体的な展開

聖書の翻訳によって、すべての人が聖書を読んでゆくことができるようにすること、教理問答書などで人々が自分の信仰をはっきり把握できるようにすること、聖餐において主イエスが定められたようにパンとぶどう酒が信仰者たちに分け与えられること、功績を積むためではなく、キリストの愛に基づいて奉仕をすること、みことばの説教が重んじられること、信徒の集まりとしての教会が責任と使命を負ってゆくこと、会衆すべてが参与する礼拝にすることなど具体的な多くのことが改められ、新しい運動となって広まって行ったのです。

今の状況の中で

しかし、宗教改革も次第に過去のこととして押しやられてしまいます。現代の課題は、16世紀の問題とは違う側面をもっています。そこで新しい環境の中でも常に宗教改革の精神を生かし、それをいきいきと保つようにしてゆかなくてはなりません。外面的に特定の時代のあり方をじっと保っているというのではなくて、現代の世界の中での使命を考え、それにふさわしい教会が形作られることが必要です。そのために宗教改革の精神をしっかり把握し、私たちの状況の中で、それがどのように形成されてゆくのかを考えなくてはなりません。歴史の流れの中にあって、私たちはいつも新しい状況と課題に直面します。自らに対しても他者に対しても、以前に貼られたレッテルをそのまま当てはめるのでなく、いつも基本である聖書から改めて考えてゆくようにしなくてはなりません。

＊宗教改革の基本的な主張は、どういうことだったでしょうか。

(23) 信仰による日常生活

あなたがたも愛によって歩みなさい。あなたがたの間では、聖なる者にふさわしく、みだらなことやいろいろの汚れたこと、あるいは貪欲なことを口にしてはなりません。卑わいな言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません。それよりも感謝を表しなさい。（エフェソ5:2〜4）

われわれは、われわれの道を正しく真一文字に進み、ちょうど靴屋が針やきりや糸を仕事のために用いて、仕事がすめば片づけてしまうように、あるいは、旅人が宿屋や食物や寝床をただ一時の用だけにもちいるように、われわれも神がくださるすべての財貨をそのように用いよう。（ルター・大教理問答書一戒）

何をするにしても

信仰者として生きるときにも、私たちは人間としてのさまざまな側面を、ほかの人々と同じように持っています。決して精神的なことだけではなく、具体的なすべてのことが、神さまとの関係の中に保たれ、考えられなくてはなりません。神さまは私たちの造り主であり、体も理性も感覚も、すべてを与えてくださいました。病気になった時には、その日の大小便の状態など、ふだんは汚い、恥ずかしいもののように感じることも、大切な判断の材料になるように、あらゆることが、何を、どのようにしていったらよいかを判断する手掛かりになります。パウロも「食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」（Ⅰコリント10:31）と言っています。

神を中心に

神さまは、祈らなくても毎日の食事を与えてくださいます。しかし、私たちが、神さまの恵みによって与えられたことを覚え、感謝して受

けることを望まれます。世界には、十分食べることもできず、飢えている人々もたくさんいます。平和に安穏に生活しておれるなら、それはたいへん大きな恵みでありまたそれだから困っている人のことにも心を配ってゆかなくてはなりません。

私たちは、眠っている時は全く無防備です。守ってくださる方に信頼しなければ、あれこれ心配して、眠ることもできないでしょう。神さまに任せて、喜んで眠りにつく心構えが必要です。眠りは人間の死にたとえられることさえありますが、私たちは死においても同じようにゆだねることのできるお方を持っています。そして眠るのは、目覚めるためです。神によって生かされ、働いてゆくために、希望をもって起床したいものです。小教理問答には、食事の際の祈りや寝る時起きた時の祈りの例が記されていますが、その通りでなくても、いつも祈りを欠かさないようにしましょう。

時宜にかなう言葉

「時宜にかなって語られる言葉は、銀細工につけられた金のりんご」（箴言25:11）といわれます。しかし私たちは、不用意に人を傷つけるような言葉を発しがちです。舌を制することの難しさは、ヤコブの手紙がいう通りです。広い心と神さまへの信頼をもって、なんでも積極的に考え、ほかの人々の執り成しをするように努めたいものです。人の悪いうわさや中傷でなくて、明るく建設的にものごとを考え、語るように心掛けます。しかし、生真面目なことしか言わないのではなくて、ユーモアを理解し、用いてゆくことが互いの会話を楽しくします。信仰

ヤコブ3：1－12参照

における会話や慰めが、説教や聖礼典と同じように、神の恵みを伝える手段にもなるのです。

共通の基盤

同じ信仰にない人々でも、すべて神さまが造り、愛しておられる人間にほかなりません。その人たちが自分で意識していなくても、それぞれの形で神さまとの関係をもっています。それが正しいものになるように望みますが、たとえ今はそうでないように私たちの目には見えていても、お互い共通の基盤に上に立っているのです。神さまの喜んでくださる人間社会をつくってゆくように、一緒に努めてゆくことが必要です。

文化と人間と信仰

私たちが知っているキリスト教の中には、信仰は同じでも、それを伝えた人々の母国の文化の影響が認められる側面があります。アメリカの教会とその具体的な習慣の中には、ヨーロッパの場合と比べてみると、違うところもあるのです。長い独自の文化の伝統をもっているわが国の場合、キリスト教的な考えとは何かを見分け、私たちの中でたしかに信仰が生きるように努めなくてはなりません。文化的な装いに違いがあっても、人間は人間ですし、その人間に向かって、神さまは働きかけてくださいます。私たちは私たちの心をもって、みことばを聞いてゆきます。そしてこの世のことは、私たちが神の民として歩む旅路における、一時的な材料でしかありません。それにとらわれてしまうのでなく、自分の信仰のかてになり、人々のためになるように有効に用い、目標を目指してひたすら進む姿勢を保ってゆきましょう。

＊信仰に生きる日常の中で、自分にとっての課題になることは何でしょうか。

(24) 職業を通しての奉仕

わたしたちは主イエス・キリストに結ばれた者として命じ、勧めます。自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。そして、兄弟たち、あなたがたは、たゆまず善いことをしなさい。

（テサロニケ 3:12～13）

神によって定められたすべての身分は、‥神の戒めとみことば、命令に従ってそれぞれの召しを成就するものである。

（アウグスブルク信仰告白27条）

神の召しと職業

私たちはどのような立場にあっても、それぞれ神の救いに与かるようにと召されています。しかしそれは、この世のさまざまな関係を捨てて、ひたすら祈りと礼拝に没頭するような生活に入ることを意味するのではありません。むしろこの世における自分の立場や、関係、従事する仕事も、私たちが神さまへの信仰をもって生き、隣人に仕えてゆく現場であるのです。職業はただ食べてゆくことができ、家族の生活を支えるためだけでなく、人々のために尽くす働き場として考えてゆかなくてはなりません。また直接収入を得るわけではなくても、職についている人を支え家族の面倒を見る家事や育児も、同じように大切な働きの場です。

**与えられること
選択すること**

しかし、神さまの召しだからと言って、一度ついた自分の職業は、もう動かすことのできない、確定したものというのではありません。自分のしたい気持ちと、適性、能力によって、また人々が必要としていることによって、何を自分の仕事としてゆくのかを考えます。自分の意志に反して、道がふさがれている場合もありま

す。しかし、その中で自分の使命を見つけてゆくようになるかもしれません。自分の都合でなくても職を失ったり、定年になったりして、新しい職を見つけなくてはならない場合もあります。職業の種類や職場を固定化して考えるのでなく、どういう立場にいても、そこで神さまの召しにこたえて、神と人とに仕えてゆく働きをしてゆかなくてはならないのです。

信仰にふさわしく

もちろん、なかなか自分の意にかなった仕事が見つけられないからといって、いつまでも自分の仕事に安住できず、都合が悪くなったらすぐ投げ出してしまうのも困ります。逃げの姿勢を取ろうとする人は、どこにいっても落ちつかないという結果になりがちです。むしろ、いつでも与えられた場所に、それを通して仕える大事な意味を見つけて、積極的に取り組んでゆく必要があります。職業に貴賤はなくても、現代の職業の中には、目先の利益のみを考えて、ほんとうに人々の役に立っているかどうか、よく検討しなくてはならないような仕事もないわけではありません。その意味では、それによって自分も成長してゆき、人々のためになる仕事に従事することを目指してゆくことが必要です。

信仰の証しとして

給料を得るための仕事をするのは、単に生活のためであって、自分のしたいことをするための手段に過ぎないと考える人もいます。たしかに、ただ仕事に忠実で、働きバチのようにひたすら仕事をしてゆくことだけを目的にするのではなく、自分の人生の意味や目的をもっていることは大切です。しかし、仕事をする中でもよ

い働きをして、信仰の証しとなることを忘れてはなりません。ほんの生活のためと考えることによって、たずさわっている仕事そのものや、仲間の働き人を軽視する結果になってはなりません。むしろ忠実な働き手であることによって人々から信頼され、その働きの原動力である信仰を認められるようになりたいものです。

人間回復への努力

けれども現代の仕事は、細分化していて、全体の中での意味が見えにくくなったり、機械的な反復の中で歯車の一つのようになってしまったりすることもあります。また、よかれと思ってしている働きが、見方を変えると公害のもとになっていたり、ほかの人たちの生活をおびやかす結果になっていることも、決してまれではありません。むしろそれが現代の悩みとも言えるでしょう。それだけに、ただ狭い範囲でことを見るのでなく、広い展望をもってゆくように努力しなくてはなりません。そして人間全部がよりよい生活と働きをもってゆける世界を目指してゆきたいものです。といっても、グローバルな視野の中では、あまりにも多くの課題があります。しかし、まず自分ができることをしっかり果してゆくことが必要でしょう。そして社会の中での自分の仕事の意味を考えて、よい仕事をしてゆくだけでなく、自分の人生の中で、それがどんな意義を持つかを省みる必要があります。働き人たちが、それぞれ人間らしい生き方を保ってゆけるように、労働の条件についても心を配ってゆく必要があります。職業も神さまの召しであれば、神さまのみ旨にふさわしいあり方が求められるのですから。

＊自分自身の働きの意味や課題について考えてみましょう。

㉕ 市民としての責任

ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。

（フィリピ1:27）

福音はこの世の支配、国の秩序、結婚生活を否認するのでなく、これらすべてが神のまことの秩序として保たれ、またそれぞれの者が召されたところに従い、それぞれの立場において、キリスト者の愛と正しいよい行ないを示すことを欲するのである。

（アウグスブルク信仰告白16条）

この世に生きる

言行録16：21，フィリピ3：20参照

フィリピの町はローマの植民地で、ローマから遠く離れていたにもかかわらず、その住民はローマの市民としての誇りと特権を持っていました。それと同じように、天に本国をもつ信仰者は、み国の民としてふさわしい生活を地上でもすることが期待されています。フィリピの信徒への手紙にパウロが書いている福音にふさわしい「生活」（1:27）は、市民生活という意味にもとれる言葉です。私たちはこの世の中で、ひとりで生きているのでなく、市民としての共同の生活を送ります。その市民生活にも、キリストを信じる者にふさわしいあり方が求められています。信仰をもったからといって、この世の生活から切り離された生き方をするのではないし、反対にただこの世のことはこの世のやり方ですればよいというのでもありません。かえってこの世の生活の中に、神のみ心を実現してゆくように努めなくてはならないのです。福音を伝えることはもちろん第一のことですが、神さまはまた、人々がこの世で秩序正しく平和に暮らしてゆけることを望んでおられます。

委ねられた務め

地上のすべての権威の背後には、神の正義の意志があります。それは、具体的な権威をもっている人々の仕方をそのまま肯定するというのではなく、むしろ神の意志によって正しく行なわれているかどうか、つねに検討しなくてはならないという意味です。しかも民主的な現代にあって、責任をもつ人々のあり方は、人々の監視のもとにあるはずです。この世のことは悪の力の領域で、信仰とは無縁だというのではありません。たしかに、ともすればこの世の支配は悪魔的になりかねません。しかしだからといって、信仰者はこの世から足を洗うというのではありません。責任ある立場にいる人が、神さまから委ねられている務めを、正義と愛の心をもって果たすように努め、一般の人々もそれを助け、見張ってゆくことが求められています。

預言者的な見張り

旧約の預言者たちは、ただ魂の問題を警告しただけでなく、たいへん政治的な働きをもしました。政治の働きを受け持つ人々に対して、神さまのみ旨からの批判と見張りの役目を果したのです。しかも、そのような働きは専門の知識がある人がすればよいとか、そういう人でなければできないというのではありません。戦争の時、矢内原忠雄は東大の職を追われる原因の一つとなった「国家の理想」という文章の中で、素人にはわからないという逃げ口上を厳しく戒め、預言者イザヤの言葉を引いて、当時の国政を批判しました。選挙の時に一票を投じることはもちろんですが、それだけで役目を果たしたというわけではありません。もちろん政治上のあらゆる問題に首を突っ込む必要はないし、ま

たできもしないでしょうが、預言者の場合と同じように、神のみ旨を示すことが政治的な意味をもってくることを恐れることはありません。

正義を洪水のように

この世の生活において最も基本的なことは、神が求められる正義をどのように実現するかということです。個人的な関係の中では、愛が直接的な形で表現されることもできます。しかし社会的な広がりの中では、愛の働きが多くの人に及んでゆくために法律が定められることも必要になります。逆に法の基本は正義であり、その目標は愛の実現でなければなりません。そのような意味で、正義への感覚を鋭くしてゆくことが必要です。集団の中に生きるとき、個人的な利益だけを考えるのでなく、全体の益をも考えなくてはなりません。

それはただ直接自分の属する国や社会だけでなくて、全人類、全世界のことに目を向けてゆくようにさせます。物のあり余っている豊かな国もあれば、餓死する人の絶えない国もあります。人種や民族によって、差別のひどいところもあります。宗教的な力が政治を権威付けて、批判を許さないというような形になる場合もあります。個人の平穏な生活というだけでなく、いろいろな側面に神経を働かせてゆくことが求められます。もちろん何もかもひとりでできることはできませんが、与えられた立場でできることがあるに違いありません。人の力だけで理想的な社会を実現することはできないとはいえ、少しでも神さまのみ心に添った世界が実現するように、広い視野をもって努めましょう。

＊私たちに身近かな市民的責任の中にはどういうことがあるのでしょうか。

(26) みことばを伝え、隣人に仕える

あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あながたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。　（マタイ28:19,20）

われわれはできるかぎりすべての人に親切をつくし、援助を与え、その益を増進すべきであり、しかもそれをただ神のために、神を喜ばせるためにのみ、そして神がいっさいを豊かに補われることを信頼して行なうべきである。　（ルター・大教理問答書）

派遣された弟子たち

主イエスは、その伝道の生涯の中でも、またことに復活ののちに、弟子たちを人々の中に遣わされました。それは神の国の福音を伝え、人びとの患(わずら)いを癒(いや)すためでした。換言すると、伝道と奉仕のためということができます。最初の弟子たちは、十分な訓練を受けたのちに遣わされたわけではありませんでしたし、自分たちの力により頼むことができたのでもありません。主が与えてくださった力のほかは何も持ってはいませんでした。もちろん働きによっては、そのための訓練も必要になりますが、信仰者はだれでも同じように遣わされています。みことばを証しし、隣人のために仕えてゆくのです。

信仰の姿を示す

礼拝に毎週出席すること自体が、大切な証しでもありますが、それぞれに伝道の働きが、もう一歩進めてできないかを考えてゆきたいものです。私たちが出会う人々に、時間をかけても信仰を伝えるように努めましょう。自分でよく話することができなくても、「来て、見なさい」と教会の交わりに連れてくることはできます。教会に来た人々への配慮は、その教会に対する

ヨハネ1：46参照

印象になります。教会のさまざまな仕事への奉仕も、目立たなくても大切です。そして最も大事なことは、自分自身の信仰の態度だと言えます。パウロがそうであったように、いつでも主イエスへの信頼をもって、何とかして捕らえようと努めている姿は、それこそが他の人々に訴える力をもっています。

フィリピ3：12参照

隣人となる

みことばを伝えるだけでなく、人々への愛の行為は、神による平和を具体化し、ひいては信仰を証しすることになります。よいサマリア人の譬えを語られた主は、「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と尋ねられました。ユダヤ人たちは、サマリア人を民族的にも信仰的にも不純な人々として軽蔑し、敵視していました。しかし内的に純粋であろうとした人々ではなく、むしろサマリア人の方が適切な助けを与え、模範となる話を、主はなさいました。このサマリア人は、追いはぎに襲われた人が自分に関係ある者だったからではなく、自分の方から困っている彼に近づいて助けを与えたのです。主イエスを信じる人は、善い行いで神に近づくことを考える必要はありませんが、逆に仕えるためにやって来られた主を自分に迎えて、今度は隣人の必要を中心として仕えるように考えることができるようにされます。

ルカ10：30－37参照

愛の実現へ

私たちの愛の行為は、個人的に働くのであれば、どんなに頑張っても限界があります。しかし社会のみんなの力で、多くの人々が恩恵を受けることができるようにすることはできます。差し当たって困っている人に手を延ばすのは、

まずしなくてはならないことですが、同時に助けの必要な隣人は特定の個人だけではないことも考えなくてはなりません。困難の中にある人を助けるだけでなく、問題の起こらないような環境をつくり、社会全体がよくなってゆくように考えることも必要です。個人的にいくらかの助けをして、よいことをしたと、自分だけで満足していてはならないし、限られた人に限られた助けを与えるだけでも十分ではありません。さまざまな角度から、困っている人々を助けるためには、いろいろな専門家や組織も必要となります。個人的な関わりの中だけではなくて、広く社会的に考えてゆくことが求められます。そして自分もまた人から仕えられ、助けられることを、謙虚に感謝して受けてゆくことにもなります。みことばを伝えることと共に、愛のわざが、社会に、また国境を越えて、ひろく人々の中に進められてゆかなくてはなりません。

与えられた使命

信仰をもって、神さまとの交わりに入れられた人には、喜びだけでなく大きな使命が与えられています。わが国に伝道が始められた時、多くの海外から来た宣教師たちは、福音を伝えると共に、さまざまな社会事業を起こして、人々のために尽くしました。その伝統を継いで、私たちもできる働きをしてゆきます。福音のことばは、自分にとって一番大切なことですが、しかしそれを自分のところで止めないで、さらに溢れさせてゆかなくてはなりません。そして信仰は、隣人への愛によって生活の中で具体化されますし、人間の一番深い求めは福音信仰によって満たされるのです。

＊差し当たり自分でもできる伝道や奉仕のわざにどんなことがあるでしょうか。

（付き）　聖書の諸文書

あなたたちは聖書の中に永遠の生命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。

（ヨハネ 5:39）

聖書に収められた文書の名とその内容を簡単に紹介しておきます。聖書の中での順序は、それらのものが書かれた順序によっているのでも、内容の時代順というわけでもありません。信仰の目によって見られ、内容によって整えられた順序です。旧約、新約の名称は、神さまに与えられた旧い契約、新しい契約の意味です。旧い契約はイスラエルに与えられた救いの約束ですが、具体的にはノアに与えられた約束（創世9章）、アブラハムとの契約（創世17章）、シナイ山でのモーセに与えられた契約（出エジプト20章、申命5章）、ダビデに対する契約（サムエル下7章）などがあります。全体として救い主が与えられる約束と言ってもよいでしょう。そして新しい契約はイエス・キリストにおいて与えられました。直接その言葉があるのはルカ22:20を初めとする箇所ですが、主イエスによって与えられたすべての信仰者に対する救いの約束ということができます。旧約聖書はユダヤ人の聖書に基づいていて、その順序はユダヤ教の正典が定められる以前にあった70人訳のギリシャ語聖書の影響を受けて、教会の中で伝統的に扱われてきた順序です。以下においてもそれに従って、ユダヤ人の正典のグループわけでなく、便宜的にわけてあります。プロテスタントの諸教会では、39巻の旧約聖書と27巻の新約聖書が聖書の中に含められています。新約聖書は、主イエスを証しし、伝えた初代教会の文書です。それぞれの書は、一巻の聖書にまとめられることを意図して書かれたものではなく、それぞれの時代に書き記されたもので、その年代や書いた人の名も必ずしも確かではありません。しかし全体として、聖霊の導きによって書かれ、保たれ、キリスト者の信仰と生活の規範になるものとして、教会の正典と定められています。

旧約聖書（39巻）

1．五　書　モーセによって書かれたと伝えられましたが、むしろモーセを中心とする一連の書といえます。「律法」ともよばれていますが、創世記や族長の物語、イスラエルの古い歴史を含んでいて、単なる律法集ではありません。それらの物語を通して、神のみ前に歩む道が示されています。

創世記　天地の創造から人の堕落、ノアの洪水、バベルの塔の物語に続いて、アブラハムを初めとする族長たちの物語が含まれ、イスラエルが神の約束の地に至りながら、エジプトに住むようになった次第が語られています。

出エジプト記　モーセが神の召しを受け、イスラエルの民を率いてエジプトから脱出し、シナイ山で神の契約と「十戒」を受けたこと、それと共に当時のイスラエルに与えられた多くの戒めがしるされています。

レビ記　レビ族はイスラエルの中で祭司の役割を果たした部族です。この書は彼らの役目であった礼拝と祭司職に関する細かな規定がしるされています。

民数記　出エジプトの後、荒れ野を旅するイスラエルの民の人口調査が記されていることから、民数記の名があります。荒れ野での出来事といろいろな律法がしるされています。

申命記　「申命」は神の戒めを繰り返して述べるというほどの意味です。荒れ野の旅を導いたモーセが約束の地を眺めつつこの世を去る前に残した決別の説教の形で、たくさんの律法がまとめられています。

2．歴史書　モーセなきあと、ヨシュアによって導かれたイスラエルの民が、約束の地カナンに入りますが、その歴史が進展すると共に、信仰的には次第に下降線をたどります。ついにはイスラエル民族が建設した王国は滅ぼされ、アッシリア、ついでバビロニアの捕虜となります。その中で信仰的集団としてのイスラエルの団結が目指され、結果的には救い主への備えがなされます。その歴史が12の書物になって

いますが、その中でルツ記とエステル書は歴史的な「物語」と見られます。

ヨシュア記　ヨシュアを指導者とするイスラエルの民が、40年の荒れ野の旅を終えてカナンに侵入し、その地を割り振って住み着くようになる次第と、ヨシュアの民に対する勧めが記されます。

士師記　ヨシュアの後、信仰あつい12人の士師（さばき人）たちが、次々にイスラエルの指導者の役目を果たしてゆく時代の出来事の記事です。

ルツ記　士師時代を舞台とする女性ルツの短い信仰的物語。

サムエル記上下　士師の時代が終わって、イスラエルが王国として形を整える事情が描かれます。サウルに続いてダビデが王となり、国を盛んにしますが、ダビデの個人生活は信仰的であると同時に、家庭的に弱点をもっていて、問題の種となります。

列王記上下
歴代誌上下　ダビデの後継者ソロモンによって、イスラエルは繁栄を極めますが、それも長続きせず、やがてイスラエルとユダの南北二王国に分かれて争い、さらにいずれも外敵アッシリアとバビロニアのために滅亡するまでのことが記されています。エリヤ、エリシャ、イザヤらの預言者の活躍、ヨシア王の宗教改革の出来事もこの時期のことです。ペルシャ王キュロスはバビロニアを滅ぼし、バビロニアに捕囚となっていたイスラエルの民は故国に帰ることを許されます。

エズラ記　捕囚の民が故国に帰還する次第と、神殿を再興してエルサレムをもう一度聖なる都とするための処置とざんげが書かれています。ネヘミヤ記エズラ記に書かれた出来事の後、ネヘミヤがエルサレムに石垣を築き、エズラが神殿のために新しい規定と律法を公布したことが記されます。

エステル記　ペルシャにいた離散のユダヤ人の危機を、一人の女性が救った物語。ルツ記と共に、一連の歴史とは少し異なる物語で、共に女性を主人公としています。捕囚から帰還したの

ちの時代が背景になっています。

3. 詩　歌　ヘブル語聖書で「諸書」の中に入れられている詩や格言集などで、イスラエルの信仰の具体的な生活への反映でもあります。

ヨブ記　苦難の中にあって、なぜ自分をこのような目に合わせられるのかと、神に問うヨブが、神と人との人格的交わりにおいて結論を見いだす信仰的な劇詩。

詩　編　神殿における讃美歌、個人的な嘆きや願い、感謝の歌など、イスラエルの民の信仰の詩集です。「律法」がモーセに帰せられているように、詩の多くがダビデのものとされています。

箴　言　ペルシャ時代の後、ギリシャの勢力が盛んになる頃から、その影響のもとで編集された格言集です。「生活の智恵」的なものが集められていますが、その根本に神への信仰があります。

コヘレトの言葉　箴言などと共に、智恵文学とよばれる部類に属します。実生活に対する無常観や懐疑が吐露されて、伝統的な信仰を問いなおそうとしていますが、基本には神への信頼があります。「コヘレト」は集会の招集者あるいは集会の中で語る者を意味し、以前は「伝道の書」と呼ばれていました。

雅　歌　もともとはコヘレトの言葉と対照的な恋愛の歌。しかし単に恋愛を謳歌するものとしてではなく、神と人との交わりを歌ったものとして受け取られています。

4. 預言書　ソロモン王時代に頂点に達したイスラエルの栄華が衰退し、国の独立が失われたころ、本来の神信仰に帰るように説いた預言者たちが現れました。神はそのみことばを彼らに託し、民に悔い改めを説かせ、救いの約束を与えられました。列王記にはエリヤ、エリシャらの活動が記され、ヘブル語聖書ではヨシュア、士師、サムエル、列王が「前の預言者」とよばれています。文書の残っている預言者としてイザヤ、エレミヤ、エゼキエルは、分量的にも内容的にも大預言

者とよばれますが、時代的には、アモス、ホセアらの方が彼らより先になります。哀歌とダニエル書は預言書と少し性格が違いますが、ふつうその中に含めて数えられます。

イザヤ書　預言者イザヤは紀元前８世紀に活躍しましたが、イザヤ書はイザヤ一人の筆によるのではなく、40章以下は背景の時代も違うと認められています。神の民に対する叱責と慰め、ことに40章以下は主のしもべによる解放と救いの希望が告げられています。

エレミヤ書　エレミヤは紀元前７世紀に、南王朝滅亡の危機に際して、神への信頼と服従を語りました。深い個人的な信仰を表しています。

哀　歌　滅ぼされたエルサレムの廃墟での悲しみの歌。

エゼキエル書　エレミヤの後、バビロニア捕囚時代の預言者エゼキエルの民に対する警告と慰めで、祖国復興の希望を説いています。

ダニエル書　物語と幻の部分からなり、「人の子」のような者がとこしえに支配するためにやってくる希望を語っています。幻を通して神のみわざを語る、いわゆる「黙示文学」の代表的な書です。

ホセア書　紀元前８世紀頃、アモスに少し遅れて北王国に現れた預言者ホセアは、自分の失敗に終わった結婚生活の中から、あるいはそれに重ねて、神の憐れみを預言しました。

ヨエル書　ヨエルは南王国の預言者で、いなごの災害に事寄せて、終末の主の日について語っています。

アモス書　紀元前８世紀の半ばに出た預言者アモスによるもので、預言文書としては最も古いものといわれます。社会の不義不正に対する神の審判を宣告し、神の義を強調しています。

オバデヤ書　旧約聖書中最も短い書で、捕囚期に書かれました。エドム人のおびやかしと、究極的な神による望みを語っています。

ヨナ書　預言者ヨナが、異邦人の町ニネベに悔い改めを説くように

遣わされた教訓的な物語で、福音書にもキリストの型を示すものとして引かれています。

ミカ書　紀元前８世紀ホセアからイザヤの時代に活躍したミカによる不義に対する神の叱責と審判、民に対する約束と慰めの預言です。

ナホム書　神の民をしいたげるニネベに対する審判と、神に信頼する民へ復興のよいおとずれが告げられます。紀元前７世紀半ばのこととされています。

ハバクク書　紀元前7世紀末から6世紀にかけての時代に、神の民の罪に対して、神がカルデヤ人を起こして罰したもうが、やがてそのカルデヤ人もその悪によって罰せられ、神の民に最終的な救いが来ることが約束されています。

ゼファニア書　エレミヤの時代の前に活躍したと思われるゼファニヤの書で、主の日が異邦人にとってだけでなく、ユダにとっても、恐るべき災難の日であるけれども、少数の残りの者に救いが約束されることが告げられます。

ハガイ書　捕囚後の紀元前８世紀後半、ユダの復興について預言したハガイの書。

ゼカリヤ書　ハガイの少し後に現れ、神殿復興に力を尽くしたゼカリヤの預言で、柔和なメシアの姿を示しています。

マラキ　書捕囚後の民に、倫理的、宗教的な問題について戒め、主の日の来ることを告げています。

新約聖書（27巻）

1．福音書　イエス・キリストの出来事を伝える書として、四つの福音書があります。それぞれ著者と伝えられる人の名を冠して呼ばれています。マタイは使徒のひとり、マルコはエルサレムの若い弟子で、パウロやペトロの協力者でした。ルカはパウロの同労者であった医師であり、ヨハネは主に愛された弟子とされます。しかし現在の福音書は、それぞれ幾つかの資料をもととして書かれており、その書かれた年代も、聖書に並べられた順序と一致はしません。それぞれに特徴が

あり、用語も違うところがありますが、同じ主を指し示しています。イエスの歴史的な伝記というのではなくて、信仰の目で見た主のおとずれの出来事を喜ばしい音信＝福音として伝えています。

2. 使徒言行録　主の復活の後、初代教会がどのように形成され、発展して行ったかを、ルカがペトロとパウロの働きを軸として述べています。

3. パウロの手紙　使徒言行録にも記されるように、パウロは教会の迫害者からキリストの使徒へと変えられ、教会の働きに重要な役割を果たしました。その働きの中で記した手紙は、主イエスによる救いを証しし、新約聖書の中で最も古い文書に属しています。

ローマの信徒への手紙　パウロが紀元56年ごろコリント滞在中に、ローマの信徒にあてて書いた手紙で、彼はローマを訪問することを希望して、あらかじめ自分の信仰内容を順序だてて述べています。そのため、信仰と信仰による生活の基本的な問題が明らかにされています。

コリントの信徒への手紙Ⅰ,Ⅱ.　ギリシャ南部の国際商港都市コリントに、パウロは1年半ほど留まって伝道しましたが、その後教会の中で信仰上、また道徳上のさまざまな問題が生じました。そのような問題の解決のために記したパウロの手紙。

ガラテヤの信徒への手紙　ガラテヤは、パウロが最初の伝道旅行で教会を建設した地方です。パウロが去った後、ユダヤ主義的な教えが入って来て、信仰があいまいにされました。それに対してパウロが戦闘的な福音の主張と、教会に対する愛を込めて書いた手紙。

エフェソの信徒への手紙　小アジアのエフェソを中心とする地方の教会に、パウロが獄中から送った手紙。

フィリピの信徒への手紙　獄中のパウロに教会からの贈り物をたずさえて来たエパフロディトを、フィリピに帰すにあたって記した感謝の手紙。

コロサイの信徒への手紙　パウロが獄中から小アジアの教会に書き送った回状。誤った教えに対抗して、正しいキリスト信仰に立つことを求めています。

テサロニケの信徒への手紙Ⅰ,Ⅱ.　マケドニアの首都テサロニケに伝道した後の状況を知って、喜びと感謝のうちにパウロが書いた手紙。主の来臨について述べられています。第一の手紙は紀元50年頃書かれ、新約聖書の中で最も古い文書です。

テモテへの手紙Ⅰ,Ⅱ.　エフェソ教会の指導者であり、パウロの弟子であったテモテへ、その職務のための手引きと偽りの教師に対する警告を記した手紙。テトスへの手紙と共に牧会書簡ともよばれ、パウロより後の時代の事情をも反映しています。

テトスへの手紙　教会の指導者及び会衆が、偽りの教えに惑わされず、正しい信仰の生活を保つように、警告と戒めを書いた手紙。

フィレモンへの手紙　フィレモンのもとから逃亡した奴隷オネシモのために、パウロがフィレモンに送った執り成しの手紙。

4. ヘブライ人への手紙　パウロの手紙と考えられたこともありますが書いた人は明らかではありません。旧約聖書との関連で、イエス・キリストが救い主であることを説いています。

5. 公同書簡　次の七つの手紙は、多くの教会にあてて書かれたものとして、公同書簡と古くからよばれてきました。その成立は1世紀の終わりから2世紀前半になると考えられています。

ヤコブの手紙　ユダヤ的伝統を重んじる発信者ヤコブによる一般の教会のための教訓と勧告の手紙。

ペトロの手紙Ⅰ.　迫害の恐怖にさらされていた小アジアの教会に、生ける望みをキリストにおいて持つように勧めた手紙。

ペトロの手紙Ⅱ.　誤った教えに対して警戒し、神の約束に信頼して真の信仰に生きるように勧めています。

ヨハネの手紙Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ.　誤った教えを警戒し、忠実な信仰に生きるように勧め、信仰と愛を強調しています。古くから使徒ヨハネの手紙といわれてきましたが、Ⅱ,Ⅲは恐らくヨハネとよばれた長老の手紙と考えられます。

ユダの手紙　ヤコブの兄弟ユダの手紙とされます。内容的にはペトロの手紙Ⅱと共通し、戒めと勧告を記しています。

6. ヨハネの黙示録　旧約のダニエル書などと同じく「黙示文学」とよばれる文体で、幻や象徴で使信を伝えています。とくにキリストの来臨による終末の勝利が告げられます。1世紀の終わりか2世紀の初め頃、迫害の中にあったキリスト者たちを励ますために書かれました。

著者　石居正己（いしい　まさみ）

略歴　1928年福岡県に生まれる
日本ルーテル神学校卒業。フィラデルフィア・ルーテル神学校、ルター神学校（セントポール）留学。
日本福音ルーテル箱崎・武蔵野・蒲田教会他で牧会。
日本ルーテル神学大学・組織神学教授
現在・ルーテル学院大学名誉教授

著書　「創世記」講解、「教会の歴史と系譜」、「ルターの信仰に生きる」（共著）、「イエスのまえとうしろ」他多数。

訳者　ピノマ「ルター神学概論」、「ルターの祈り」（編・訳）、「ルター著作集」（2. 5. 9. 10巻）、他多数。

キリスト教信仰へのガイド

～愛と恐れと信頼と～

2

1999年10月31日発行
著　者　石居　正己
発行所　日本福音ルーテル教会・西教区（協力）宣教室
発行者　松本　義宣（西教区）・徳弘　浩隆（宣教室）
住　所　〒730－0045
広島市中区鶴見町2-12　日本福音ルーテル教会西教区事務所
TEL（082）241-3695　FAX（082）241-3715
http://www12.big.or.jp/~jelc-wd
印　刷　合資会社　ダイトウ製版